

講義を始める前に……

1. 「宗教」とは何だろうか、自分なりの考えをまとめてみよう。
2. 「宗教社会学」とはどういう学問か、なかみを想像してみよう。

宗教は、社会構造である

社会学は、社会現象を科学的に解明する学問です。

社会は、大勢の人間の集まり。そして社会現象とは、それら人間の相互行為が複雑に絡まりあったものです。あまり複雑すぎて、どこからどう説明してよいのか、手をつけられない。そこで、説明の便宜のため、社会現象のなかの相対的に安定した（変化しにくい）部分、すなわち、社会構造にまず注目するのが普通です。社会構造を説明変数とみなし、それを前提として人びとの行為を説明しよう、と考えるのです。

社会構造の例として、さまざまなものが考えられます。人びとの行動をパターン化する（予測可能にする）ものは、みんな社会構造ですから、法律、制度、役割、文化、規範、組織、慣習などが含まれます。そうして宗教も、社会構造である！ 社会構造の中でも、もっとも重要な社会構造であると言えるのです。

マックス・ヴェーバー（Max Weber 1864-1920）の宗教社会学

マックス・ヴェーバーという偉い社会学者（どれぐらい偉いかというと、カール・マルクスを除けば、後にも先にも彼より偉い社会学者はいない、というぐらい偉いのです）がおりまして、宗教に注目すると、歴史上現れたさまざまな社会を見事に分析できるということを示しました。特に有名なのは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という論文ですが、彼はここでキリスト教、なかでもプロテスタントに特有の「禁欲」の考

え方が、資本主義経済の成立にとって不可欠だったという、驚くべき結論を示しました。「禁欲」すなわち欲望を否定したはずが、反対に、利潤追求を目的とする資本主義が生まれてしまったという点が驚くべきなのです（そのロジックは、のちに検討します）。

ヴェーバーは、世界中の宗教を比較し、各国社会の差異を解明する道を開きました。宗教は、その社会の社会構造になっていますから、これを補助線にすると、その社会のことを統一的に解明できるのです。こうした宗教社会学は、民族問題が噴出するポスト冷戦時代の国際社会を理解するために欠かせない、基本的情報を与えてくれるのです。

「宗教」という言葉は、明治時代の発明品

さて、宗教と言うとなんとなくわかった気がしますが、いざ定義しようとするむづかしいのです。私自身はいろいろ考えた結果、宗教を、「ある自明でないことがらを前提としてふるまうこと」と定義しているのですが、ここではそれと関連して、「宗教」という言葉の意味を探ります。

「宗教」という言葉は、英語の religion の訳語として、明治時代に発明されたものです。西洋文明にとって、religion と言えばまずキリスト教。そして、本家にあたるユダヤ教と、姉妹宗教にあたるイスラム教のことです。ギリシャ・エジプトの宗教や、ヒンドゥー教、仏教、儒教は、その他大勢（偶像崇拜）の扱いです。

江戸時代、religion にあたる言葉は「宗門」でした。具体的には、天台宗、真言宗以下、幕府が公認した仏教の宗派を指します。キリスト教は「切支丹」で、邪宗門の扱い。儒教は「儒学」とよばれ、宗教として意識されていませんでした。「宗門人別帳」が戸籍の代わりになっていたぐらいで、日本人は原則として全員仏教徒だったのです。

神道は、宗教でない?!

そんな日本が開国して明治の世となり、「信教の自由」を外国に約束する羽目になりました。キリスト教の布教は自由、しかし、天皇を中心とする明治政府への忠誠は確保したい。そこで苦肉の策として、「神道は宗教にあらず」という政府の公式見解が生まれました。このアイデアを考えたのは、井上哲次郎という東大哲学科の教授ですが、神道は宗教ではないのですから、キリスト教徒にも仏教徒にも、天皇崇拜を強要できる。軍人勅諭も教育勅語も、そうして可能になります。こうして、国家全体が宗教化・兵営化する可能性（つまり、大東亜戦争の可能性）がととのったわけです。

「神道は宗教でない」のはなぜか？ それは神道が、日本人の生活や風俗・習慣に溶けこんでいて、特別にそれを信じるまでもないからだといえます。でもそれを言えば、イスラム教だって生活に溶けこんでいる点では同じでしょう。江戸時代まで日本人は、神も仏も一緒に信じていたはずですが（神仏混淆）、そんなことは棚にあげた詭弁がまかり通った。神道が宗教になった（国家が神道と分離した）のは、日本が戦争に負けて、GHQがそう命令したからなのです。日本国憲法にも政教分離の原則がうたわれました。

日本人はなぜ、宗教を軽蔑する？

日本人は、ひとくちで言えば、宗教を「軽蔑」しています。「苦しいときの神頼み」という諺があります。宗教を信じるのは「弱者」「女ども」「病人」……と相場が決まっています。立派な大人は宗教と縁がないものということになっています。

日本人はこれが当たり前だと思っているので、あまり意識しません。でも、そうなのです。そしてそれは、江戸幕府の政策、そして明治政府の政策のせいなのです。

幕府は、布教して信者を増やすなど一切の宗教活動を禁止しました。そのかわり檀家制度をつくって、僧侶の収入を保証しました。葬式さえやっていれば、生活に困らない。そういう環境を用意し、僧侶を堕落させようとしたのです。これが効果をあげ、民衆は僧侶を尊敬しなくなりました。信仰の単位は個人でなくて「家」なので、「うちの宗旨は何だっけ」という宗教的無関心も生まれました。明治政府は、檀家制度を温存するいっぽう、神道を強要して（それ以外の宗教は危険視して）天皇の絶対化をはかりました。そういう歴史が尾をひいて、日本人の頭に巣くっているのです。

日本人は、宗教について無知だ

日本人は宗教を軽蔑しているくせに、宗教について無知です。滑稽なことです。学校でもどこでも、宗教のことを学ぶチャンスがないからなのですが、何とかすべきです。

こんなことがありました。私の友人のところに、霞が関から深夜電話がかかって来ました。「地球環境の国際会議で、条約の案文に stewardship と書いてあるけれど、何のことがよくわからない」というのです。困った役人は、ロンドンから本省に電話し、本省でも誰もわからなかったので、とうとう友人のところに電話がかかってきました。

stewardship は「管理責任」と訳しますが、神が世界を創造したあと、その管理を人間に任せたとある聖書の記事が背景になっています。要するに、人間が自由に自然を利用・改造していい（だから責任もある）という考えですが、ここから品種改良や捕鯨禁止や生物の多様性保護といった考え方が出てきます。驚くべきなのは、日本の一流官庁や国際交渉の担当者が、欧米社会の行動の根底にある哲学・宗教について、基本的なことを知らないという点です。日本人は、人間も自然の一部と考えるので、stewardship の考え方はなじまない、文案から外してくれ、と交渉することも考えつきませんでした。

エホバの神 vs アラーの神?!

日本人がどれだけ宗教のことを知らないか、例をあげて説明しましょう。

日本人がそれでも比較的詳しいのが、クリスマスでおなじみのキリスト教。それと、歴

史と伝統のある仏教、漢文の時間に習う儒教です。

ではまず、キリスト教。キリスト教の神は、「天にまします我らの父」ですが、ではユダヤ教の神はなにか？ エホバ（ヤーウェでもよい）の神。はい、正解。イスラム教の神は？ アラーの神。はい、よろしい。それでは、なぜこの三つの宗教は仲が悪いのか？ それは、どれも一神教で、それぞれエホバの神、父なる神、アラーの神を信じているために、本当の神はどれかをめぐって争いになるから——と考えていませんか。

それは、おお間違い。神が、三人いるわけではありません。エホバとは being（ありてある者）という意味で、名前ではない。アラーも「神」という普通名詞で、名前でない。一神教では神は一人だけなので、名前は必要ないのです。つぎに、この三つの神は同一人物。エホバ＝父なる神＝アラーなのです。このことは、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒にも十分意識されています。知らないのは日本人だけです。

こういう基本的な事実をおさえないで、キリスト教のことがわかっていると言えるでしょうか。キリスト教の理解には、ユダヤ教、イスラム教との比較が欠かせないのです。

人間は死んだら仏になる？！

つぎに、日本人が仏教を理解しているか？ 人間が死んだらどうなるか、日本人にきいてみます。すると、幽霊（魂）になって、しばらくその辺にいる、と答える。それからどうなる？と聞くと、三途の川を渡って、極楽に行き、仏さまになる。これが平均的な回答です。「お陀仏」というくらいで、人間は死んだら仏になると思っているのです。

インド人にこういうことを言うと、笑われます。仏教は輪廻の思想を前提にしていますから、死んだらもう一度、生まれ変わる。浄土宗が「極楽往生」の思想を広め、それが日本古来の靈魂観とごっちゃになって、「死んだら仏になる」という通念が生まれました。これはももとの仏教と何の関係もありません。

こうした誤解はキリスト教にもあって、「人間は死んだら天国に行く」という俗説がまかり通っています（『マッチ売りの少女』の影響でしょうか？）。神の国は、生きた人間の行くところで、神だってやっぱり生きています。死んでしまった人間はわざわざ復活して、最後の審判を受け、神の許し（救い）を受けた者だけが神の国に入る。これが正統なキリスト教の死生観です。

日本の神は死者の神

そもそもこういう誤解が生じるのは、日本古来の伝統にあります。イザナギは、妻のイザナミが死んで黄泉の国に行ったので、追いかけて行きました。神も死ぬのです。日本には八百万の神々がいますが、たぶんいまはもう死んでいる。神ばかりか、人間も死ぬと、神社に祀られたりします（菅原道実、徳川家康、明治天皇、靖国の英霊、……）。日本の神は、死者であり、死者たちの神です。キリスト教の god を「神」と訳したのが、そもそもの誤解のもとでした。

日本人は、神々の子孫です。従って神々は、日本人の祖先です。祖先であるからには、死んでいます。日本の神々は、日本の島々や、自然や、農作物や、日本人を「産み」ました。いっぽうそれに対して、一神教の神は、この宇宙と人間を「造り」ました。神の命令で、人間は死ぬのです。神自身は、生きており、永遠に生き続けます。ヤーウェもアラーも、くりかえしこの点を強調します。

日本は儒教国家だったか

それでは、儒教はどうか？

江戸時代、幕府は儒教を奨励し、武士は儒教を学びました。江戸三百年の思想といったら、儒教しかないくらいです。明治時代の教育勅語にも影響を与えましたし、今でも『論語』の大好きな社長さんが沢山います。ですから、かつて日本は儒教国家だったのではないかと思うひとがいても無理はありません。

日本は儒教国家だったか？ 儒教の本場である中国が、そう思ったことは一度もありません。李氏朝鮮は、真面目に儒教国家を建設し、科挙を取り入れ、文人官僚（両班やんぱんといいます）が政治をし、家族制度や風俗習慣を儒教の古典に合わせて改めました。朝鮮は儒教化の進んでいない日本を、野蛮な国だと考えていました。中国＝父、朝鮮＝兄、日本＝弟、これが当時の東アジアの秩序です。（Q：そんな日本が明治になって「脱亜入欧」と言い出したら、中国、朝鮮の人びとはどう思うでしょう。）

日本は朝鮮と違って、政治制度や風俗習慣を儒教の原則に合わせて変えることはしませんでした。儒学者のなかには、科挙を実施しよう、儒教の儀礼を行なおうと主張する者もいましたが、科挙の実施は、江戸幕府の権力（幕藩体制）を否定することにはかなりませんから、あまりに非現実的です。日本人は、『論語』のような精神訓話が好きなだけで、儒教の儀式・制度にしたがって、冠婚葬祭も、政治も、何もやりませんでした。儒教でいちばん大事なものは制度（それも政治制度）なのです。それを拒否したのですから、日本は儒教国家ではありえません。

日本人は、儒教を“思想”だと受け取りました。しかし儒教は、社会を実際に運営するための“マニュアル”なのです。この点を理解しない日本人は、儒教を誤解しています。

宗教社会学とは何か

実例はもうこれぐらいでいいでしょう。

日本人は要するに、宗教音痴なのです。宗教を必要とせず、世界の主要な宗教にも無理解なまま、何千年も過ごしてきました。このまま国際社会に出るのは、大変危険です。

日本人が、宗教社会学を学ぶとしたら、それは、“どこそこの偉い宗教学者がこうこう言った”というたぐいの知識を詰めこむことではありえません。そうではなくて、日本社会はなぜ宗教を拒否するのか、この社会の構造はなぜ宗教によって与えられないのかを、ほかの民族、ほかの社会と比較するなかから解明することにほかなりません。日本人が自分たちの社会を自己理解する、それが、宗教社会学を学ぶ本当の目的です。（もちろん、外国の受講者の方々にとっても、この学問はきっと有益なはずです。）

ここまでの講義を聞いて、あなたが宗教社会学を学ぶのはなぜか、その目的を自問自答してみましょう。自分が何を知りたいのか、その目的意識をはっきり持てば、これからの授業が面白く、また有意義なものとなるはずです。

ここまでの講義を聞いて……

1. 自分はなぜ宗教社会学を学ぶのか、その目的を、まとめてみよう。
2. 下線の引いてある言葉や文章について、自分の言葉で説明してみよう。

【参考図書】

橋爪大三郎 1986 『仏教の言説戦略』勁草書房。1989 『冒険としての社会科学』毎日新聞社。呉智英・橋爪大三郎・大月隆寛・三島浩司 1996 『オウムと近代国家』南風社。1996 『橋爪大三郎の社会学講義』夏目書房。1997 『橋爪大三郎の社会学講義2』夏目書房。

☆次回（4月30日）は、「古代ユダヤ教：契約と律法」を講義します。プリントを先渡ししますから、あらかじめ目を通してきて下さい。

☆毎回のレジュメ余りは、西4号館603 橋爪研究室の前に置いておくので、取って下さい。

☆任意レポートの提出は、教室、メール、または西4号館3階入口脇の郵便受（橋爪）へ。

☆質問があれば hashizm @ valdes.titech.ac.jp まで、または紙に書いてメールへ。

☆レジュメは <http://www.valdes.titech.ac.jp/~hashizm/> で読むことができます。

キーワード……契約、律法、救済、預言、終末、パリサイ派

ユダヤ教とは何か

ユダヤ教とは、どんな宗教でしょうか？

キリスト教がユダヤ教から分かれてきたという程度の知識はあっても、日常あまりユダヤ人に接する機会のない日本人には、よくわかりません。ナチス・ドイツによるユダヤ民族の大虐殺(ホロコースト)。むしかえされるユダヤ人陰謀説。シェークスピアの『ヴェニスの商人』のシャイロックのイメージ(これこそ、キリスト教徒の偏見の典型です)も重なって、よくわからないが変な人びと、という印象がひとり歩きしています。そのいっぽうで、マルクス、フロイト、アインシュタイン、レヴィ=ストロース、チョムスキーら天才的知識人を続々と生み出した、尊敬すべき民族でもあります。

ユダヤ教を理解すれば、キリスト教=西欧文明の全体像も明らかになるのです。

古代文明は、都市国家から始まった

ユダヤ教の生まれた当時のオリエント一帯は、ほかにもさまざまな宗教を生み出しました。そしてその背景となったのは、古代の都市国家文明でした。

「都市国家」と言っても、ピンとこないかもしれません。日本には、都市国家なんてないからです。四大河川(チグリス・ユーフラテス、ナイル、インダス、黄河)流域の古代文明は、みな都市国家を形成しました。ヨーロッパやアメリカ大陸にも、都市国家がありました。日本だけに、それがない。このことが異常なのです。

さて、大きな河川の流域は、農耕に適しています。まっ平らですから、溝を掘れば灌漑も簡単です。そこで栽培植物(小麦)が伝わると、たちまち集落が形成されました。土地が肥沃で生産性が高いので、農民たちには、職人や神官、軍人を養う余裕が生まれ、社会階層の分化が進みます。同時に、土地の争奪をめぐる民族紛争が常態化し、集落は周囲を城壁で囲って要塞化しました。これが、都市国家です。

都市国家には、①城壁をもつ(要塞)、②統治機構と軍隊をもつ、③神殿をもつ、④文字・暦法・算術・法律などをもつ、といった特徴があります。この段階以降の人類文化を「文明」とよびます。

都市国家の戦争は、皆殺しが原則

農耕の適地は限られていましたから、土地の争奪戦は過酷を極めました。外敵が現れると、住民は城壁の内側に籠もります。外敵は城壁を取り囲み、2年でも3年でも兵糧攻めをします。ついに城壁を崩したら、中の住民は女も子供も皆殺しか、さもなければ奴隷となるのが決まりでした。都市も完全に破壊し(平らにし)て、その上に新たに自分たちの都市国家を建設します。中立はありえないので、全員が総力で戦いました。(Q:日本にこのような総力戦があったのでしょうか?)

安全のため、都市国家は攻守同盟を結びます。その際、互いの神を祀る祭祀同盟のかたちをとるので、神殿は多神教的となります。また、強大な都市国家を中心とする帝国も現れ、多くの都市国家を従えて広い版図を誇りました。帝国への貢ぎ物(税)と軍事的義務を果たす代わりに、自治と宗教の自由を認めてもらうのが当時のやり方です。

古代ユダヤ民族がユダヤ教を生み出した背景に、こうした当時の厳しい国際情勢があったことを忘れてはなりません。

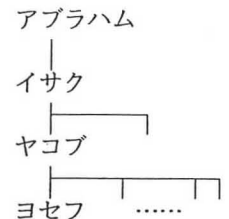
族長時代のユダヤ民族

ユダヤ民族の歴史は、『聖書』やさまざまな考古学的資料から知ることができます。

ユダヤ民族は、セム族のグループで、アブラハムを伝説的な祖先とし、紀元前2000年頃歴史の舞台に登場します。最初は羊の群れを追う遊牧民、のち定着農耕民となります。

遊牧時代のユダヤ民族は、族長の統治する部族制をとり、祭祀も族長が行ないました。

「創世記」によれば、アブラハムは神の声を聞き、ユーフラテス下流の都市国家ウルを出て、ハランを経由したあと、カナン(いまのイスラエル)の地にたどり着きます。神はこの地を、アブラハムの子孫に与えると約束します。アブラハムの妻サラは、石女でしたが、神の使いの預言によって男子(イサク)が生まれます。だが、イサクが成長したある日、アブラハムはイサクをモリヤの丘で犠牲に捧げるようにとの神の声を聞きます(イサクの犠牲)。悩んだ末、祭壇を築いていざ命を奪おうとしたとき、神の使いが現れてアブラハムの信仰を祝福します。イサクはハラン出身のリベカと結婚し、エサウとヤコブの双子をえます。母リベカに愛されたヤコブ(別名イスラエル)は、兄エサウと偽って父イサクの祝福を受け、長子権を奪います。ヤコブは4人の妻と12人の息子をえますが、最愛の妻ラケルの子ヨセフを大事にしました。残る息子たちは妬んで、ヨセフをエジプト行きの際商に売渡し、父には死んだと嘘をつきます。ヨセフはエジプトで大臣となり、飢饉のためエジプトにやってきた父・兄弟と再開。以後、ユダヤ人たちはエジプトに住むことになるのです。



モーゼと十戒

「出エジプト記」によれば、エジプトで奴隷の境遇に甘んじていたユダヤ民族を救うために、モーセが誕生します(紀元前13世紀の初め頃)。モーセはファラオの王女に育てられますが、ユダヤ人の奴隷を鞭打っていた役人を打ち殺してしまったため追放されます。そしてシナイ半島に逃れ、ミディアン人の娘と結婚し二人の子供をもうけます。ある日ホレブ山に登り、神の啓示を受けたモーセは、エジプトへ戻り、数々の奇蹟を起こしてユダヤ人を脱出させることに成功します。ファラオはこれを追いますが、モーセは海を分けて民を通らせ、追手の戦車は海に吞まれました。ユダヤ民族はそのあと、荒野を40年も彷徨うことになります。モーセはシナイ山で、神から石板に刻んだ十戒を授かり、契約の箱に納めてこれを敬います。老いたモーセは、カナンの地を目の前にして息を引取り、代わってユダヤ人を率いるのはヨシュアでした。

カナン地方への定着

ヨシュアの率いるイスラエルの民は、まず都市国家エリコを攻略します。契約の箱を担いで城壁の周りを七回まわると、城壁は崩れ落ちました。次にアイの町も攻略したあと、シケムの地に祭壇を築いて、十二部族の代表が主なる神への服従を誓い、宗教同盟を成立させます(シケムの誓い)。ヨシュアはカナンの地をつぎつぎ平定したあと、十二部族ごとにそれぞれ土地を分け与えました。定着農耕の時代の始まりです。

定着後も遊牧時代の族長制は維持されましたが、指導者となったのは士師(judge)と呼ばれるカリスマ的な軍事指導者でした。ユダヤ人たちのあいだに、カナンの先住農民のバアル神信仰が浸透してきますが、士師たちはこれに反対し、外敵と戦います。タボル山でシセラの軍を破った女士師デボラ、三百人の手勢でミディアンの大軍を破ったギデオン、ペリシテ人と戦い、美女デリラに騙された怪力サムソンらの士師たちが有名です。

王国の栄華

優勢なペリシテ人を前に、ユダヤ民族は強力な王を持望するようになります。このとき預言者サムエルが出て、ベンヤミン族の若者サウルに油を注ぎ、イスラエル初代の王としました。サウルは息子のヨナタンと共に、各地を転戦しますが、次第に人望を失っていきます。代わって王位についたのは、サムエルに油を注がれた金髪の巻毛の羊飼いの少年、ダビデでした。ベツレヘム出身のダビデはサウルの王宮に仕えていましたが、軍功をサウルに妬まれ、手勢を率いて荒野に逃れます。そしてサウル父子が戦死すると、族長たちに推されて王位に就きます。ダビデはエルサレムを攻略して都と定め、詩篇に収められている多くの詩をよみました。その子ソロモン王は、エジプトと同盟し、エルサレムの神殿を築き、イスラエルの黄金時代を築きます。ソロモンの死後、王国は北のイスラエル王国、南のユダ王国に分裂します。以上は、紀元前11世紀半ばから百年あまりの出来事です。

王国の分裂と、バビロン捕囚

分裂したあとの北王国には、再びバアル神崇拜などが復活します。すると預言者エリヤが出て、アハブ王の妃イゼベル（フェニキア出身）に従うバアルの祭司四百五十人を殺害します。まもなくアッシリア帝国が興って、首都サマリアは大軍に包囲され、北王国は滅びます(BC710年頃)。そこに住んでいたユダヤ民族は連れられて行方不明となり、歴史の舞台から姿を消しました。無人の地となったサマリア一帯に、アッシリアは他の民族を移植させ、彼らの一部はユダヤ教に改宗してサマリア人と呼ばれるようになります。

南のユダ王国にも危険が迫ります。紀元前 622年にヨシヤ王が、エルサレムの神殿を改修したところ、律法の書が「発見」され、ユダヤ教復興の運動が始まります。しかし新バビロニアが興って、同 586年には南王国も滅ぼされ、人びとはバビロニアに連行されます（バビロン捕囚）。異郷での生活は50年続きますが、ペルシャ王クロスが新バビロニアを滅ぼしたため、ユダヤ民族は解放され故国に帰ることを許され、神殿を再建します。

預言者たちの活動

こうした苦難の時代、多くの預言者が現れて民を導きました。

古代の宮廷にはたいいてい、超能力をもった予言者が王に仕えていました。ユダヤ教の預言者はそれと違って、①民間人であり（権力と距離をおき）、②必ずしも教育ある人物でなく、③神のこゝろを聞いて警告を発する、という特徴があります。サムエルは弟子をひき連れ預言者の集団を形成していましたが、単独のアマチュア預言者も現れ始めます。たとえばアモスは、南ユダの牧人で、サマリアに現れ北王国の滅亡を預言したが、発言を禁じられたため、預言を書物（アモス書）に残しました。ヤーウェを信仰しないなら南王国も滅びると預言した、エルサレム貴族階級の第一イザヤ、同じくエルサレム滅亡を預言したミカ、バビロニアから七十年で帰国できると預言したエレミヤ、神殿再建によるユダヤ民族再生を預言したエゼキエル、らがつぎつぎと現れます。特に、ヤーウェが唯一の神であると世界に知らせるため、他人の罪を負って苦しむ“ヤーウェの僕”が現れるとする第二イザヤの預言は、イエス＝キリストを先取りするものとして重要です。（イザヤ書1-39章は第一イザヤ、40-55章は第二イザヤ、56-66章は第三イザヤの預言です。）

神殿の再建とヘレニズムの時代

捕囚された南王国の人びとは、北王国の二の舞いを恐れて結束を固め、食物規制や安息日など、バビロニアの習慣と異なる民族伝統を強化しました。帰国ののち、預言者ハガイとゼカリヤの激励のもと、第二神殿が再建されます。エズラ、ネヘミヤらの指導でユダヤ民族は、祭司を頂点とするエルサレム神政共同体に組織されました。祭司たちの会合である長老会議が自治を行ないました。

アレキサンドロス大王の征服以後、ギリシャ文化の影響が強まり、ユダヤ教が禁止されたり、ギリシャの偶像が立てられたりしました。紀元前2世紀の初めにはエジプトの勢力下に入り、BC63年にはローマの属州となるなど、混乱の時代が続きます。ハスモン王家がこの間、民族主義的な抵抗を続けましたが、とうとうそれに代わって、イドゥメア人のヘロデ大王がローマの支持を受けて王位に就きます（イエス在世当時のヘロデ・アンティパス王は、その息子です）。しかし、AD44年に王制が廃止になってローマが直接統治するようになると、歴代ローマ総督は皇帝崇拜を強要するなど失政を重ね、反乱が続発しました。ローマは大軍を派遣し、AD70年にエルサレムが滅亡、3年後にはマサダ要塞で抵抗した部隊も全滅し、ユダヤ民族は以後二千年、故国なき民として世界に離散します。

契約としての宗教

ユダヤ教（キリスト教、イスラム教）で理解にくいのは、神との契約の考え方です。もともと遊牧生活を送る部族社会では、契約が重要です。家畜を預ける、商売する、結婚する、すべてが契約。定住していないので、契約で相手との信頼関係を確実にしておかないと安心できません。

一般に契約は、対等の関係ですが、神との関係は上下の契約です。古代帝国が属国と交

わした宗主権契約がモデルらしく、ヒッタイト王国で発掘された文書が、旧約の契約とそっくりです。上下の契約とは、日米安保条約みたいなものと思えばよいでしょう。上下でも契約であるからには、双務的です。ユダヤ民族は偶像を拒み、ヤーウェ以外の神を信仰しません。神はその代わりに、ユダヤ民族の安全と繁栄を保障します。契約は、ノアの契約、アブラハムの契約、モーセの契約、ダビデの契約……と繰り返して結ばれ、その内容が律法（英語では law、すなわち法律）です。聖書は、この契約をしるす書物なのです。

人間はしばしば神に背きます。そのままだと神の怒りをかい、滅ぼされてしまいます。そこで預言者が現れ、人びとに契約を守るよう警告する仕組みになっているのです。

『旧約聖書』の成立

キリスト教徒は旧約、新約の二つの聖書を持っていますが、旧約聖書はユダヤ教の聖書です。ユダヤ教では最初の五つを重視して、トーラー（モーセ五書）と言います。

創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記	……トーラー
ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記上・下、列王紀上・下	……前期預言者
イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書	……後期預言者
ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、	
ハバクク書、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書	……十二小預言者
詩篇、箴言、ヨブ記、雅歌、ルツ記、哀歌、伝道の書、エステル記、ダニエル書、	
エズラ記、ネヘミヤ記、歴代志上・下	……クトゥービーム

以上はユダヤ教の『聖書』（タナハ）の構成ですが、キリスト教の『旧約聖書』は配列が多少異なります。

古代ユダヤ教の成立

『聖書』は、ユダヤ民族の歴史を記述したものです。しかし、それがどこまで歴史的事実かとなると、アブラハムやモーセの実在は疑うべきでしょう。創世記の成立は新しく、バビロン捕囚の後と考えられます。遊牧民であったユダヤ民族が、カナンの地に侵入して定着したこと、士師の時代をへて王制に移行したことは確実な史実でしょう。

ヘブライ語は母音を書かないので、YHWH はエホバとも、ヤーウェとも読めます。「有りて有る者」の意味。ふだんはその呼び名を避けて、「主」と言います。ヤーウェは嫉妬ぶかい怒りの神ですが、もとはシナイ半島辺りの戦争神で、それを、カナンに侵入するユダヤの各部族が共同で祀ったものと考えられます。

ユダヤ教が形を整えたのは、ヨシヤ王の改革以後のこと。聖書の編纂も進み、祭儀よりも律法を重視する方向が打ち出されます。

イエスの時代には、三つの派が対立していました。サドカイ派は、エルサレムの神殿で祭儀をもっぱら行なう世襲的な祭司階級で、現状維持の保守的なグループです。パリサイ派は、祭司と同じ厳格さを互いに要求する平信徒の集団で、律法を重視し、教育のための会堂（シナゴーグ）を各地に建てました。エッセネ派は、「義の教師」に導かれ“新しい契約”を結んだ人びとで、財産を共有し終末を信じ、洞窟で祈りの生活を送りました。イエスはユダヤ教徒で、エッセネ派に近かったと考えられます。

そのほか、暴力に訴えても律法を死守すべきだとする過激派の熱心党（ゼロータイ）がおり、ローマ軍を相手に武装闘争を繰り返しました。

□参考文献□

犬養道子 1977 『増補版 旧約聖書物語』新潮社
共同訳聖書実行委員会 1978 『新約聖書 共同訳・全注』講談社学術文庫 318
山形孝夫監修 1986 『COLOR BIBLE 聖書（全8巻）』小学館
石田友雄 1980 『ユダヤ教史』（世界宗教史叢書4）山川出版社
マックス・ヴェーバー 1962 『古代ユダヤ教』みすず書房 → 岩波文庫

☆次回（5月14日）は、「キリスト教とは何か」です。プリントを読んでおいて下さい。

キーワード……キリスト、愛、神の国、罪、復活、公会議、三位一体

キリスト教とは何か

クリスマスを祝い、教会で結婚式を挙げる日本人。キリスト教について、最低限の知識はあるようです。しかし、本当にキリスト教を理解しているのかとなると心許ない。

日本人のうちクリスチャンの割合は、カトリックとプロテスタントを合わせても人口の約3%程度。3百万人あまりで微々たる人数です。いっぽうお隣の韓国は、数十年前でこそ人口の10%そこそこでしたが、その後どんどん増え続け、いまでは国民の半分近くがクリスチャンです。日本人はどうやら、キリスト教をどこかで拒否しているらしい。

私の知人のKさんは、敬虔なクリスチャンの友人が末期の癌で入院したので見舞いに行きました。友人が「死ぬのは嫌だ」と騒ぐので、Kさんが、「お前は神の信じ方が足りない。いずれ復活するのだから安心して死ね」と叱りつけたところ、奥さんが出てきて「何も病人にそこまで言わなくても」と恨まれたそうです。クリスチャンにしてもこの通り。

キリスト教は、イエスが現れたところから出発しました。イエスを神の子・キリストと信ずる人びとがユダヤ教から分かれ、キリスト教が始まります。そこでまず、イエスの生涯について要点をまとめ、そのあとでキリスト教の構造を理解しましょう。

イエスの生涯

イエスの記録は、『新約聖書』の福音書に書いてあることがすべてです。福音書は、初期のキリスト教会に伝わった伝承をまとめたもので、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる4書があります。このうち、はじめの3書は内容が似通っているのので、共観福音書といえます。なかでもマルコ福音書が素朴で、もっとも古いかたちをとどめています。

福音書以外に記録がないので、歴史的イエスの実在を疑う人もいます。しかしクリスチャンは当然実在を信じていますから、われわれも実在を仮定して話を進めましょう。

イエスは、ガリラヤ地方のナザレの町に、紀元前4年頃生まれました。父は大工のヨセフ、母はマリヤ。子供時代からシナゴクで、ユダヤ教の教育を受けたと考えられます。二十歳前後のことはよくわかりません。家を出て、洗礼者ヨハネの洗礼を受けます。（洗礼者ヨハネは荒野で皮ごころを着、イナゴを食べていた預言者で、「悔い改めよ、神の国は近づいた」と説きました。のちにヘロデ王に捕らえられ、王の娘サロメの求めで首を斬られます。）そのあと、荒野におもむき、試練を受けます（サタンの誘惑）。

人里に出たイエスは、漁師のペテロ、アンドレアスの兄弟ら、十二人を次々と弟子にします。そして、病人を癒し、水の上を歩き、わずかな食べ物を大勢に分け与えるなど、かずかずの奇蹟を行ないます。群衆の前に「貧しい者は幸いである」など説教をします（山上の垂訓）。また、巧みな喩えによる数々の説教をし、パリサイ人やサドカイ人と論争をしました。ローマへの税金をめぐる「カエサルのはカエサルへ、神のものは神へ」と答えたのは有名です。ペテロに「ペテロ（岩）よ、お前の上に教会を建てよう。そしてお前に天国の鍵を授けよう」と告げ、ペテロを初代の教皇に任じます。

イエスの最期

イエスはエルサレムでも説教をし、長老たちの反感を買い、最期を予期します。ゲッセマネで弟子たちと最後の晩餐をとり、弟子ユダの裏切りによって逮捕されます。ペテロは見とがめられ、三度「イエスを知らない」と言います。イエスは最高法院で裁きを受け、死刑の判決を受けます。総督ピラトはイエスを尋問し、過越の祭の慣例で囚人ひとりを釈放しようと言います。民衆はイエスでなく「バラバを釈放せよ」と叫びます。イエスは茨の冠を被せられ、ゴルゴダの丘で「INRI」（ユダヤの王、ナザレのイエス）と記された十

字架にかけられます。「主よ、なぜ見捨てたもうのですか……」という詩篇の一節（22-1 熱烈な神の讃歌）を叫んで息絶えます。遺骸は信徒が引き取り、洞窟に埋葬します。三日ののち、イエスは復活し、弟子たちのところに現れ、そして昇天します。

預言者としてのイエス

以上は、福音書に書いてあることですが、歴史上のイエスがどんな人物だったかを考えようとすれば、復活や昇天など、付加的な部分を割り引かなければなりません。

まず、当たり前のことですが、イエスはユダヤ人で、ユダヤ教徒でした。そして、預言者のように活動しました。彼は決してキリスト教徒ではありませんでした。

ここでユダヤ教の預言者について復習しておきましょう。預言者は、本人の意志と関係なく神に選ばれてなるもので、特別の学識・訓練も必要ありません。そして権力者や人民に向かって、神の言葉（警告）を伝えます。人びとは、彼の言葉が神から出ていると思えば彼の言うことを聞き、そうでなければうち殺します。小室直樹博士は、預言者の社会的機能を、システム理論の用語で「ビルト・イン・スタビライザー」（社会があるべき状態を逸脱したとき、それをあるべき状態に戻すための制御メカニズム）と呼びました。

イエスの権威

イエスの説教を聞いた人びとは、イエスが《権威ある者のように教えたので驚いた》といます。これを、イエスが急にいばったのでびっくりした、などと誤解しないように。権威(authority)とは正しさの規準であることで、本来は神の性質です。イエスが神（から）の言葉を語ったので、人びとは驚いたのです。

イエスは病人を直し、死者を甦らせ、水の上を歩くなど、かずかずの奇蹟を起こしました。奇蹟はよく、オカルトや超能力と混同されます。しかし奇蹟は、預言者が神の権威を背後にしていることを証明するためのもので、むしろ、超能力やオカルト現象がありえない（自然は厳格に自然法則に従う）ことを前提とする考え方なのです。

イエスの教え

イエスは『旧約聖書』を縦横に引用し、独創的な比喩をまじえて説教しました。そのテーマをひとくちで言えば、「愛」です。イエスは、形ばかり律法（ユダヤ教の宗教法）を守るパリサイ派の人びとを批判し、神が律法を与えたのは、神が人類を救済しようという意思（愛）を持っているからであること、その愛にこたえて、われわれ人間も神を愛し、互いに愛し合わなければならないことを説きました。イエスは、律法の中で重要なのは何かと質問した律法学者に、「心を尽くし……汝の神、主を愛せ」（申命6-5）、「汝の隣人を汝のごとく愛せ」（レビ19-18）の二つだと答えています。そしてこうした愛の教えは「律法を廃止するためでなく、律法を成就するため」（マタイ5-17）のものだとも言います。

愛が実現され、神と人びとが和解して（罪を許されて）生きる新しい世界が、神の国です。これは、裁きの日のあとに訪れるのですが、決して地上の国ではありません。神の国についてイエスが断片的にのべているところによると、そこでは人びとは、天使のように性別なく暮らし、地上の富をいささかも必要とせず、永遠の生命を与えられます。

初期教会の活動

イエスの死後、失望した群衆や弟子たちは四散しますが、やがてイエスが復活したと信じられるようになって、ペテロら十二弟子を中心とする初期教会ができあがります。初期教会がどういう活動をしていたかは（「使徒行伝」などを除けば）はっきりした記録がないままに、一世紀あまりを経て、ローマ帝国内の巨大宗教として姿を現します。

初期教会は、①ユダヤ教内部の一分派としてエルサレム周辺で活動したグループ、②地中海一帯のユダヤ人・ギリシャ人らヘレニズム世界に布教したグループ、の二系統があります。はじめ前者が優勢でしたが、ユダヤ人がローマに反抗して敗れエルサレムの神殿も解体され、ユダヤ人が故国を追われてからは、後者が優勢となります。（ですから、新約

聖書の原本はギリシャ語です。)そして、後者を代表するのが、使徒パウロです。

ローマ帝国の各地でキリスト教徒は、地下墓地(カタコウム)などに密かに集まり、集会を行ないました。信者の取り合いなどが原因で、ユダヤ教と険悪な関係となります。

使徒パウロの活躍

パウロは、小アジアの町タルソのよい家庭に生まれたユダヤ人で、ローマの市民権も持っていました。彼は血気盛んなユダヤ教徒として、「先頭に立って教会堂を破壊し、……男女信徒をひっ捕らえては獄に投げこ」(犬養・下:358)むなど、キリスト教迫害の先頭に立っていましたが、紀元33年か34年ごろ、ロバに乗って旅をする途中でイエスと会い、回心(conversion)します。それからはキリスト教を精力的に広め、多くの書簡を著しました。『新約聖書』の書簡の大部分は、パウロが執筆したものです。そのあと、紀元64年のローマの大火の折に、皇帝ネロに捕らえられて処刑されました。

パウロは、十字架で死んだイエス＝キリストの死を、神との新しい契約(新約)と解釈しました。キリストは、メシヤ(ギリシャ語で救世主)の意味。そのイエス・キリストが神の子(ひとり子)であり、人類に福音を伝えるため降誕した、と考えるのです。そして罪のないまま十字架にかけられ、復活して天に昇りました。この事実が奇蹟であり、神の大いなる計画をあらわすものです。パウロによって、キリスト教の教義が完成します。

パウロの思想

そのほか、いくつかのパウロの主張が、キリスト教の性格を決定づけました。

まず第一に、パウロは、神の国は近づいた(英語では near at hand と訳した)と言います。これは、ごく近いうちという意味ですから、急いで終末(最後の審判)を迎える準備をしなければならない。その結果、現世に対して無関心となります。こんな切迫した状況では、結婚や家庭生活もおちおち続けられません。そこで《未婚者とやもめに言いますが、皆わたしのようになり独りであるのがよいでしょう。しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい》と言います。カトリックの聖職者(神父)が独身なのは、このためです。

また、《人は皆、上に立つ權威に従うべきです。神に由来しない權威はなく、今ある權威はすべて神によって立てられたものだからです》と「ローマ人への手紙」でべています。ローマ帝国に反抗するなというのですが、これ以来、地上は世俗の国王が支配し、教会は霊の救済(神の王国)に責任をもつ、という分担が生じました。国王は教会を庇護して信仰を擁護し、教会は国王に戴冠して統治に協力します。これが二王国論です。

ところが、すぐ来るはずだった終末が来ないまま、二千年近く経ちました。それでもキリスト教徒は、明日が世界の終わりでもいのように覚悟しているのが正しいのです。

律法から信仰へ

イエスの犠牲は、旧約のイサクの犠牲の裏返しでもあります。アブラハムはたったひとりの息子・イサクを、神の命令で殺そうとしました。神はナイフを握ったアブラハムの手を止め、その信仰を祝福します。今度はあべこべに、神がひとり子を犠牲にしたのです。

イエス・キリストが十字架で死ぬと、なぜ人類が救われるのでしょうか?

ひとつの解釈は、古代の同害報復(目には目、歯には歯……)の原理によるもの。ある部族(A)の一人が別の部族(B)の誰かに殺されると、部族Aは復讐に部族Bの一人を殺す権利を持ちます。そこで通りかかった部族Bの誰か(罪がない)を殺すと、復讐は終わり、犯人は罪があるのに助かるのです。それと同じで、人類は罪があるので、死を運命づけられています。しかしイエスが、罪のないのに人類の罪を背負って死んだので、人類は神から赦されることになります。神の子イエスの犠牲によって、人類はいわばイエスの義兄弟となり、神の義理の息子(養子)として、神の国に入ることができるのです。

もうひとつの解釈は、奴隷解放の原理によるもの。人間は罪の奴隷で、自分で自分を購うことができません。奴隷には法的人格がない(売買契約の主体となることができない)からです。そこへイエスがやってきて、自分の血を支払って、人類をその主人(罪)から

購いました。いまや人類は、イエス(とその父である神)を主人とする、というのです。

いずれにせよ、イエスがキリストであり、神の子であって、罪のないまま十字架で死んで復活した、これを信仰せよ、というのがパウロの主張です。律法を守るのではなく、この事実を信仰することが、救済の条件だ、とキリスト教は考えます。そのため、ユダヤ教の定めている割礼や食物規制などはすべて廃止され、ユダヤ人以外の人びとにも急速にキリスト教が広まっていきます。

契約の更改

キリスト教にあってユダヤ教にない考え方、それが、契約の更改です。

ユダヤ教(そしてイスラム教)は、神との契約を本質とする宗教です。その契約(宗教法)は、変化しません。神と結んだ契約を、人間が勝手に変えられないからです。

キリスト教は、イエス・キリストの生誕を境に、人類史を二つに分けます。紀元前(B.C.)は、ユダヤ教の律法が神との契約であった時期。紀元後(A.D.)は、イエス・キリストへの信仰を契約とする時期。イエス・キリストは、神の子である(神と同等の権利を持つ)からこそ、旧い契約(律法)を廃止し、新しい契約を結ぶことができたのです。(ちなみにイスラム教徒は、神の「子」などというものを絶対に認めません。イエスはムハンマドより格下の、ただの預言者としての扱いです。)(Q:なぜ神は、まず律法を与えてから、後でイエス・キリストの福音をもたらすというややこしいことをしたのか?)

契約の更改という考え方があればこそ、革命の考え方も生まれます。革命とは、ある時点を境に、社会の法則性(特に法律)がまったく異なったものとなることを意味します。絶対王制をくつがえした近代市民革命も、資本主義社会を打倒する共産主義の革命も、契約の更改から派生した考え方(コロラリー)なのです。(Q:アジアの社会に革命の考え方はあるか? 伝統中国の「革命」は、ヨーロッパ社会の革命と同じか?)

集団救済から個人救済へ

もうひとつ、キリスト教にあってユダヤ教にないのが、個人救済の考え方です。

ユダヤ教では原則として、救済の単位はユダヤ民族でした。しかし、キリスト教では一人ひとりが裁きを受け、神の国に入れたり入れなかったりします。救済の単位が個人(の靈魂)であるという点で、近代的・個人主義的な宗教であると言えるでしょう。(ちなみにイスラム教も、個人救済の宗教です。)

それでは、どういう人間が救われるのでしょうか?

キリスト教は、律法を(外形的に)守れば救われるという考え方(もっと一般的に、人間が自分の行為や主体的努力で救われるという考え方)を、徹底して斥けます。救済は神の胸先三寸で決まり、人間が口を出す余地は皆無です。神を信じることは救済の条件のひとつですが、信仰は人間の自由意志なのでなく、神がわれわれを信じさせてくださると考えて神の恩恵とみなします。(だから、無信仰＝神に見放された、という意味になるのでした。)人間はもともと神に逆らうようにできている(原罪)、ゆえに自己努力では救われない、この事実をよくわきまえて、イエス・キリスト(神の愛)を信仰する——こうした「マナイタの上の鯉」状態に自分を投げ出すのが、キリスト教徒のあり方なのです。

今日の要点を復習しておきましょう:

* ユダヤ教とキリスト教の違いについて、簡単に言えば……

* イエスを信じれば、なぜ救われるのかと言うと……

☆「奇蹟の丘」「十戒」「クオヴァディス」「聖衣」など、キリスト教関係のビデオを街中で借りて感想文を書き、任意レポートとして提出できます。枚数は自由。

* 次回(5月21日)は、「宗教改革とは何か」について講義します。

キーワード……主教、教皇、救済財、聖書中心主義、天職、禁欲、救済予定説

宗教改革は、キリスト教に特有だ

キリスト教には、カトリックとプロテスタントがある——常識として、日本人はこのことを知っています。しかし、それが何を意味するのかとなると、どこまで理解しているのでしょうか？ もしかしてその対立を、仏教の小乗／大乘みたいなものだと、誤解していないでしょうか？あるいは、仏教の宗派（天台宗、浄土宗、日蓮宗……）みたいなものだと誤解していないのでしょうか？

宗教改革が、プロテスタントを産みました。宗教改革がなければ、アメリカという国家も、近代社会も生まれなかったでしょう。そして大事なことは、宗教改革はキリスト教、それも西方教会（ローマ教会）に特有な現象である（ギリシャ正教やイスラム教にはありえない）ということです。キリスト教会の社会学的な構造を理解するならば、宗教改革についてよく理解できるでしょう。

キリスト教の教会組織

仏教徒であることの必要十分条件。それは、三帰依〔後述〕を表明することです。キリスト教徒であることの必要十分条件。それは、キリスト教の正統教義にもとづく教会で、洗礼を受けることです。そして、何がキリスト教の正統教義かは、公会議で決定します。

公会議。こういうものがあるのは、キリスト教の特徴です。

初期のキリスト教会は、各地に散らばっていたユダヤ教からの改宗者や新規の入信者が集まって形成されました。十二使徒、使徒パウロらやその後継者たちは、まめに各地を連絡して回りました。各地の教会は、長老とよばれる人びとに指導されていましたが、やがて各地域の教会に責任をもつリーダー、主教（司教ともいう）が現れます。この主教たち全員が集まる会議（主教会議）が、公会議です。当時の交通事情では、これはきわめて困難なことだったので、ローマ皇帝がスポンサーとなって交通費や警護をまる抱えしないかぎり、公会議の開催は不可能でした。

しばらく経つと、主教たちを統轄する大主教が現れ、さらにその上に立つ総主教が現れます。総主教は、エルサレム、アレクサンドリア、アンチオケア、ビザンチン（コンスタンチノーブル）、ローマの五大都市に置かれました。はじめの三都市は、まもなく機能なくなり、後世まで残るのはビザンチン、ローマの総主教です。このうち、ローマ教会の総主教を、教皇と称します。こうしてキリスト教会は、平信徒－主教－大主教－総主教というピラミッド組織をしくことになるのですが、初期教会の民主的な性格はのちのちまで維持され、たとえば、ローマ教皇は主教たちの選挙（コンクラベ）で選ばれるのです。

公会議とは何か

キリスト教は、使徒パウロによってスタートしたと言いましたが、教義が今日のかたちに練り上げられていくのに、数世紀を要しました。たとえば、今日の正統教義である三位一体説は、聖書に書いてあるわけではなくて、第一コンスタンティノーブル公会議（381）で決定されたものです。公会議は、キリスト教の最高意思決定機関なのです。教祖（？）のイエスが早くに死んでしまい、教義が完成しないうちにスタートしたキリスト教は、信徒（の代表）の全体集会である公会議に、そうした権威を与えないわけには行きませんでした。

初期教会から最後で最大の教父といわれるアウグスティヌス(354-430)まで、多くの教父が現れてさまざまな解釈を唱え、論争を巻き起こしました。最大の論争は、「神の本性は分割できないから、キリストは神そのものでありえず、神聖ではあっても神性ではありえない」とするアリウスの説（ギリシャ哲学を踏まえた合理的な説）と、「キリストは本当の神性を持ち、神自身とまったく同質である」とするアタナシウスの説（原始キリスト

教の信仰そのままの説）との対立でした。第一ニケーア公会議（325）は、アリウス派を異端とすると決定しました。その後曲折がありましたが、最終的にアタナシウス派が正統となって今日に至っています。

ローマ教会 vs ギリシャ正教会

キリスト教にとって重大な転機は、ローマ帝国の国教となったことでした。

政治の混乱と分裂にみまわれたローマ帝国は、それまでキリスト教を危険視していた態度を改め、キリスト教を公認（313）し、やがて国教とします。国教とは、キリスト教に特権的な地位を認める代わりに、キリスト教会がローマ帝国の統治に協力する関係を言います。教会は、長年の念願だった、信仰を擁護する後盾をえたのです。

ところがローマ帝国が、とうとう東西に分裂してしまいます。そのため、司教全員が集まる正式な公会議が開けなくなってしまいました。その結果、教会も分裂してしまいました。ローマ教会もビザンチン教会（ギリシャ正教会）も正統と認めるのは、それ以前に開かれた6回の公会議だけです。それ以後、それぞれの教会が開いた司教会議もいちおう公会議と称しますが、キリスト教の教会全体の認めるものではありません。ローマ教会とビザンチン教会は、11世紀に互いに破門しあってから最近まで、関係を断ったままでした。今後、7回目の公会議が開かれる予定もありません。

ローマ教会と二王国論

東ローマ帝国は、強力な国家として存続し続けたので、ビザンチン教会は安泰でした。そして、皇帝が総主教を兼ねる体制（皇帝教皇主義）が伝統となります。こうした体制では、教会改革など不可能です。教会に反対すれば、即、反権力・反体制ということになって、たちまち弾圧されてしまうからです。（ちなみにギリシャ正教は、ロシア人やセルビア人などに広がるたびに、ロシア正教、セルビア正教として総主教座を分裂させていく傾向があります。マルクス＝レーニン主義は、そのロシア正教の伝統を受け継ぎ、皇帝教皇主義の教会とそっくりの特徴をもった共産党をつくり上げました。）

これに対して、西ローマ帝国はあっという間に滅んでしまったので、ローマ教会は苦勞して、後釜を探さなければなりません。ゲルマン民族をキリスト教に改宗させ、フランク王国のオットーに戴冠したり、神聖ローマ帝国に期待をつないだりしたのも、そのためです。結局、これといった強力な後盾はみつからないまま、教皇や各地の大司教が、各国の国王に戴冠する（＝正統な君主と認める）という、聖権と俗権の二人三脚の体制ができあがりました。これが、二王国論（地上の権力は国王が、霊的な権力は教会が握る二元的な体制）です。二王国論はキリスト教、特にローマ教会に特有の発想です。近代憲法にいう政教分離の原則も、もとはと言えばこれが起源なのです。

東方教会の実態と教理については、わが国であまり知られていませんが、最近よい本が出ました（落合[1998]）。詳細は、それに譲りたいと思います。

免罪符の論理

キリスト教はゲルマン民族に浸透する過程で、キリスト教と関係のない要素も吸収しました。たとえば、聖人の考え方。マリア崇拜。地獄と悪魔の考え方。中世を通じて、人びとに聖書を読ませず、教会は勝手な教義を広めてきました。ローマ教会は、天国の鍵を預かっている（マタイ福音書）。聖人たちの救済財も蓄えてある。そこで、ローマ教会のメンバーであることが、救済されるための必要条件である。教会の破門は、地獄に墮落することを意味しました。その逆に、救済財の販売、すなわち免罪符の発行も可能なのです。

これに、敢然と反対したのは、ドイツの修道士マルチン・ルター（Luther, Martin 1483-1546）です。

ルターが免罪符に反対したのは、誤解されやすいのですが、ローマ教会の金儲け主義に反対だったからではありません。もしもローマ教会（教皇）に、イエス＝キリストの代理として人間を救済する権限があるのなら、免罪符を発行してもいいし、それを買って天国に入れるなら値段はいくらでも安いものです。でも、『聖書』のどこにもそんなことは書いてない、というのがルターの言い分でした。神（だけ）が人間の救済を決める以上、人

間（教皇）がそれに関与できるはずはない——ここに宗教改革の核心がありました。

ルターの宗教改革

当時のドイツは「教皇の雌牛」とあだ名され、教会堂建築などで財政難のローマ教会に多額の税金をしばり取られていました。ドイツは沢山の小国家が分立し、遠方すぎるイギリスや王権の強いフランスに比べ、税金を集めやすかったのです。それでも足りずに、免罪符の販売も強行されました。修道士ヨハン＝テツェルの口上はこんな具合です：《お前たちは神と聖ペテロが呼んでいなさるのが聞こえないのか。お前たちの靈魂とお前たちの死んだ親しい者の救いのことを思わないのか。……そもそもお金が箱の中でチャリンと音を立てさえすれば、魂は煉獄の焰のなかから飛び出し天国に舞い上がるのだ。免罪符を買えば、キリストの母マリアを犯しても許されるのだ。》（『キリスト教史』Ⅱ：40）

怒ったルターは1517年、「九十五ヶ条の論題」を発表します。ローマ教会はこれを問題視して、ルターをローマに呼びますが、火刑になることを恐れた彼は行きません。その代わりに同年7月、ライプチヒ討論が開かれます。ローマ教会の代表とヨハン＝エックと、ルターは論争して勝利し、ついでに教皇の権威（ローマ教会に人びとを救済する権限があるということ）を否定してしまいます。教皇から破門されたルターは1521年、ウォルムスの帝国議会に出頭し、意見をのべます。《聖書の証明および明白な論拠によって私を説得するのでなければ、私は自説を取り消すことはできません。教皇も宗教会議もしばしば誤りを犯し、かつ自ら矛盾したことは明白なので、そのいずれにも私は信をおきません。》（同：60）税金を払いたくなくなったドイツの領主たちは、ルターの味方となりました。ルターはヴァルトブルク城にかくまわれて、聖書のドイツ語訳を完成させます。

ルターの思想

「信仰によってのみ義とせらる」とするルターの立場は、聖書中心主義、すなわち、個人が聖書のみを仲立ちとし、信仰によって神と直接結ばれるべきだという立場です。

ルターの思想でもっとも注目に値するのは、天職（Beruf）の考え方です。天職は神が人間に与えた任務という意味で、靴屋、農民、軍人など、世俗の職業すべてを含みます。その結果、聖職者の存在は必要なくなり、教会は平信徒（とその代表である牧師）で構成すればよいことになります。

ルターの思想はたいへん革新的でしたが、トマス・ミュンツァーの率いる農民戦争が起こると、農民戦争反対に回ります。元司祭のミュンツァーは、領主への隷属の拒否・年貢や賦役からの解放を掲げ、農民を指揮して直接民主制をめざしました。1000箇所以上の修道院や城郭が襲われたので、領主たちは反撃に転じます。ルターは『強盗・殺人的農民に対して』で、こうのべます：《彼らのしていることは悪魔の業にはかならない。……彼らは追剥や殺人者のように肉体と魂の二重の死に値する。彼らはすでに神の法と帝国の法の保護の外におかれたので、このような反逆の徒を殺すことは正しいし、法に適っている。……彼らを叩き殺し、絞め殺し、刺し殺すべきである。》（『キリスト教史』Ⅱ：79）こうして、農民戦争は鎮圧されました。

ルターが、隣人愛を根拠に国家権力を基礎づけた点も重要です。軍人からの質問に、彼はこう答えました：《真のキリスト者は地上にあっては、自分自身のためではなく、隣人のために生き、隣人に仕えるのであるから、自分では必要としないが、隣人には有用であり、必要であることを、おのが靈の本性に従って行なうのである。……キリスト者は自分や自分の事からするためには剣を帯びるべきでなく、また、剣に訴えるべきでないが、悪をとどめ善を守るために、他人のためには剣を帯び、剣に訴えてもよいし、そうすべきである》（『この世の権威について』（1523））この思想が、近代国家を基礎づけるのです。

改革派とカルヴァン

ルターの思想には不徹底な面もありましたが、その影響はヨーロッパ中に及びました。ルター派は、ドイツの東部・北部と北欧に広まりましたが、それ以外の地域には、改革派が広まりました。改革派は、人文主義（古代ギリシャの哲学など非キリスト教の文献に親しむ運動）をベースにした、ツヴィングリやカルヴァン（Calvin, Jean 1509-1564）の流れ

をくむ人びとの運動です。

カルヴァンはフランス人で、新教弾圧をのがれ、ジュネーヴを拠点に活動しました。ジュネーヴは、ローマ教会の干渉を嫌って絶縁を宣言し、指導者を必要としていたのです。カルヴァンは、教会の規則が日常生活のすみずみまで律する神政政治を理想として、ジュネーヴを実質的に統治しました。ビロードの服を着てはいけない、金の装身具もだめ、大食いは御法度といった、徹底した規則でした。カルヴァンは、新教最初の神学書『キリスト教綱要』を著します。カルヴァンの流れを汲む人びとは、フランドルからイギリスに広がり、ピューリタン（清教徒）と呼ばれるようになります。メイフラワー号でボストンに渡り、アメリカ建国の礎となったピルグリム・ファーザーズも、ピューリタンです。

カルヴァンの救済予定説

カルヴァンは理性的で峻厳な思想家でした。彼の思想は、救済予定説（predestination）として知られます。ルターは、善行ではなく信仰でのみ救われると説きました。では信仰は、人間の意志でしょうか？ 宇宙の創造主・神の絶対主権を認めるなら、人間の意志は悪を欲する（神に背く）ことしかできないはず。人間が救いにふさわしい者になるか、それとも救いを拒むかを決定するのも自分の判断ではありえません。人間が選択しないのなら、それを選択するのは神なのです。救済される人間とそうでない人間とを、神が一方的に選択する——論理的な帰結は、これ（予定説）以外にありえないのです。

この説は、人間の行動様式（エートス）を劇的に変化させました。自分は救済されているのかどうか、決まっているけれど知りえない。知りえないのに、救われると信じたい。そのため人びとは、世俗内的禁欲へと駆り立てられます。禁欲とは、欲望を我慢するという意味ではなくて、自分の行動すべてを一定の目的のために組織するという意味。修道院の生活や受験勉強などがそうです。世俗の職業に全身全霊をこめて邁進するのが、世俗内禁欲です。カルヴァン派の人びとは神の栄光を増すため、そして自分が救われていると確信するため、勤勉に労働しました。利潤は、神がその労働をよしとしたものと解釈され、蓄積して再び資本投下されました。こうして、利潤それ自体を自己目的とし、浪費や蓄財を断念した近代資本主義の種がまかれた、とマックス・ヴェーバーは考えます。

ピューリタンと社会契約

改革派は、ローマ教会の権威を認めません。国王の干渉も好みません。理想は、自分たちで政教一致の独立国家をつくることです。そこで再発見されたのが、モーゼ契約やダビデ契約など、旧約の思想でした。改革派のピューリタンたちは、この意味で国家を神聖なものと考えましたから、新大陸へ脱出してメイフラワー契約（1620）を結び、清教徒革命の際は国王チャールズ一世を、統治契約に違反し国家・国民に反逆した罪で処刑（1649）し、共和国を宣言したのです。

アメリカの初期植民地は、タウン（自治都市）を単位にした宗教共同体でしたが、ピューリタンのほかにもクウェーカー、バプティスト、英国国教会、カトリックなどさまざまな会派の人びとが入植し、多くの都市・教会・大学を建設しました。のちにアメリカ十三州は同盟してイギリスから独立し、連邦制を創設します。アメリカ合衆国の大統領制は、キリスト教を国教とした古代ローマをヒントにしたもので、信仰の自由を守る≠法律を守る、という大統領と民衆とのあいだの統治契約が憲法の基本になっています。

□参考文献□

半田元夫・今野国雄 1977 『キリスト教史Ⅰ・Ⅱ』（世界宗教史叢書）山川出版社
大木英夫 1968 『ピューリタン——近代化の精神構造』（中公新書 160）中央公論社
H・デュヒレ他 1981 『キリスト教史5・信仰分裂の時代』講談社
M・ルター 1973 『キリスト者の抵抗権について』（著作集分冊8）聖文舎
落合仁司 1998 『＜神＞の証明：なぜ宗教は成り立つか』（講談社現代新書1392）講談社

* 次回（5月28日）は、初期仏教（サンガの思想）について講義します。

キーワード……釈尊、三帰依、サンガ、三蔵、戒、界、阿毘達磨、阿羅漢

輪廻とカースト

日本に仏教が伝来して1500年近くになりますが、この間、仏教はすっかり日本に土着化してしまいました。いまの日本の仏教から、オリジナルな仏教を推し量るのは危険です。

ひとつ例をあげると、輪廻samsaraです。仏教は輪廻を前提にしており、輪廻を信じなければ仏教は理解できないのですが、日本人は信じていません。輪廻を信じるなら、祖先崇拜はありえません。仏壇に“先祖の位牌を祀る”のは、仏教でなく道教のやり方です。

輪廻はインド特有の考え方ですが、その起源はアーリア民族のインド征服にあると考えられます。紀元前20世紀～10世紀にかけて、もともとイラン高原にいたアーリア民族がインドに侵入、先住民を征服しました。征服民族はバラモン、クシャトリヤ。被征服民族はバイシャ、シュードラのカーストになったと言われます。カーストの特徴は、①全員がどこかに属し、②序列があり、③職業と結びついていることです。低いカーストの者は、前世の行ないが悪かったが、来世では上のカーストに生まれかわれるかもしれない。輪廻を信じさえすれば、現世がどんなに悲惨で理不尽でも、それを合理化できます。

インドの古代宗教をバラモン教と言います。それが徐々に変化し、やがてヒンドゥー教になりました。インド人の認識では、仏教はヒンドゥー教の一分派なのです。

釈尊の生涯

シャカ族の王子ゴータマ・シッダルタが仏教を開いたことは、よく知られています。しかしその生没年はあいまいで、565-484B.C. とか、464-383B.C. などの説があります。結婚して子供をもうけ、なに不自由ない暮らしでしたが、29歳のとき城を出て出家し、苦行の末35歳で覚りを開きます。以来80歳で没するまで、弟子たちに教を説き続けました。仏陀(Buddha: 覚った人)、如来(Tathagata: 真理に達した人)などと呼ばれますが、漢語では釈迦牟尼世尊(しゃかにせそん(略して釈尊))が正式の呼び名です(牟尼は聖者、世尊Bhagavat は尊い師の意)。釈尊ゆかりの場所(生誕の地ルンビニー、菩提樹の下で覚りを開いたブッダガヤ、初めての説法(初転法輪)をしたサルナート、入滅したクシナガラ)は四大聖地として祀られています。

当時インドでは、多くの修行者が新しい境地を開こうと修行していました。ジャイナ教を開いたマハーヴィーラも釈尊の同時代人です。ジャイナ教は仏教とよく似ていますが、極端な苦行主義。それに対して仏教は「中道」を掲げます。さまざまな師につき、苦行をやりすぎてふらふらになった釈尊に、村娘のスジャータがヨーグルトを捧げると、その美味にひらめくものがあったのでした。仏教以外の教を、仏教では外道(げどう)とよびます。

初期仏教の思想

釈尊の教えは、きわめて理性的・合理的・実践的な性格のもので、諸行無常(万物はつねに変化してやむところがない)、諸法無我(すべてのものは因縁(いんねん)によって生じたもので実体がない)、涅槃寂静(ねはんじやくめつ(迷いの火を吹き消せば心の平静がえられる))の三法印(さんぽういん、あるいは、これに一切皆苦(この世の本質は苦悩・煩悩である))を加えた四法印を、中心思想とします。因縁は、縁起(えんぎ)ともいい、「これあるとき彼れあり、これ無きとき彼れなし」のような相依性(そうゐしょう(=因果関係))をいいます。

仏教の修行は、この世の本質を苦とみて、現世の執着を離れること(=解脱(げだつ))を目的とします。四諦(しだい(=四つの真理: 四聖諦(ししやうたいともいう))、八正道(はっしやうどう(八聖道ともいう))が、その方法論です。すなわち、この世の本質が四苦(生・老・病・死)、

八苦(四苦+愛別離苦、怨憎会苦(おんぞうえく、求不得苦(ぐふとくく)、五陰盛苦(ごおんじやうく(有情(うじやうを形成している色・受・想・行・識の五陰から生じる心身の苦悩))から成り立っていることを理解する苦諦(くたい)、苦を集めおこすもの、すなわち苦の原因は煩惱(ぼんのう(無知・欲望))であることを理解する集諦(じったい)、苦の生ずる順番を逆にたどってその原因をなくしていく滅諦(めったい)、以上を日常に実践する道諦(どうたい)の四つが、四諦。正見(しやうけん)、正思惟、正語、正業(しやうごう(正しい行為))、正命(正しい生活)、正精進(正しい努力)、正念(正しい注意力)、正定(しやうじやう(正しい精神統一))の八つが、八正道です。ここで「正しい」とは、両極を見きわめ、中道を実践することです。

仏教サンガの成立

釈尊が覚りを開いたことを知って、ほかの出家者が彼のまわりに集まり、次第に仏教教団が形成されました。仏教の出家者の集団を、サンガ(僧伽)といいます。サンガは、平等・対等な出家者の共同体で、釈尊の息子ラーフラも出家しましたが特別扱いされませんでした。雨季になると雨安居(あんご)といって一箇所に定住しますが、ふだんはあちこちら遊行(ゆぎやう)しつつ、乞食(こじき)生活をします。(肉食は禁じられておらず、出されたものは何でも食べます。ただし、わざわざ動物を殺して料理するのは禁止です。)

サンガには、現前サンガと四方サンガの区別があります。

現前サンガは、樹木や岩山などを目印に「界(sima)」を結び、その区画にいる比丘(びく)たち全員で構成します。(男性の成年の出家者を比丘、女性を比丘尼(びくに)といいます。) 界は、互いに重複してはいけません。現前サンガは、食事や布施物を分配する単位になります。その全体会議を羯磨(かつま、こんま)といい、比丘10名(最低でも5名)の参加が必要です。(Q: 最初のサンガはどのように成立したのでしょうか?) 羯磨には、月2回比丘たちが戒律違反を告白する布薩(ふさつ)羯磨、出家者の得度(とくど(新しく比丘となること))を認める受戒羯磨(和尚=指導教授、阿闍梨(あじふり=チューターなど、やはり10名が参加)、界を設定する結戒羯磨、などがあります。(界を結んだあと誰もいなくなる場合は、解いておきます。)) サンガの比丘たちは、法臘(ほうろう(出家得度してからの年数))による区別があるだけで、全員平等。いつもメンバーの出入りがありますが、なにかを決めるにはその場(界)にいる人びとの全員一致(和合僧)が原則です。

いっぽう四方サンガとは、この地球上の過去現在未来の比丘たち全員をいいます。

サンガの戒律

サンガの比丘たちは、釈尊に与えられた戒律(sila; vinaya)を守りつつ、思い思いに修行します。戒のうち特に重大な、姪・盗・殺・妄(大妄語=覚ったと嘘をつくこと)の四戒は、波羅夷(はりい)罪といって、サンガから永久追放になります。そのほか、僧残法、不定法、捨墮法、……と罰則は軽くなっていきます。これらの罰則はすべて自罰で、ほかの比丘はそれを見ているだけです。仏教の修行は、自発的に行なうのが原則なので、他人に強制されるのでは意味がないのです。出家をやめるのも自由で、ほかの比丘一人に聞こえるぐらい大きな声で「戒を捨てる」と宣言すれば、その瞬間に比丘でなくなります。重大な戒律違反をしそうなときは、そうやって戒を捨て、また得度しなおせばよいのです。

釈尊は、食事に招待されても、黙っていました。将来のことをうっかり約束して、行けなくなったら「正語」の原則に反するからです。もちろん、将来の予言などしません。

戒も経も、初期にはすべて口伝で伝えられました。仏滅後、何回か結集(けつじゅう)が行なわれ、記憶力のよい各地の出家者が一箇所に集まって経典を誦誦し、誤りを修正したといわれます。貝葉片に鉄釘で字を書きつけ、経典を筆記したのは仏滅後何百年か後のことです。

仏教テキストの構成

仏教のテキストは、経、律、論の三蔵に分かれます。

経とは、釈尊の説法をまとめたもの。ふつう「如是我聞(かくの如く我聞けり)……」

で始まる、弟子の責任でまとめた釈尊の講演録です。律とは、出家者の守るべき戒（比丘の二五〇戒、比丘尼の三四八戒）や集会規則をまとめた「波羅提木叉^{はらいもくしゃ}」のこと。釈尊が制定したもので、弟子が変更することはできません。論とは、弟子が自由に述作した論文のこと。仏法全般に通じた大学者のことを、三蔵法師と称します。

初期の經典の集成を、阿含經^{あこんきょう}(Agama) といいます。ほかに、釈尊の臨終をテーマにした大般涅槃經^{だいはんねんきょう}、釈尊の前生譚を集めた本生經^{ほんしやうきょう}（ジャータカ）、ギリシャ人の王メナンドロスとナーガセーナ長老の対話、ミリンダ王問經などがあります。

仏典は、最初サンスクリット語で記され、これがシルクロードを通して中国に伝来し、漢訳されました（北伝）。日本に伝わった仏典は、みなこれです。いっぽう、パーリ語で記された仏典もあり、これはスリランカ→ビルマ・タイに南伝しました。時代が下って、チベット訳された仏典もあり、ラマ教の經典として残っています。大乘經典は、ほとんど南伝しませんでした。

部派^{ぶはい}仏教Nikaya-Buddhism の成立

サンガは仏滅の約百年のち、まず上座^{じやうざ}部と大衆^{だいしゆ}部の二つに分裂します（根本分裂）。その後、それぞれが大小十部前後に枝末分裂して、部派仏教（いわゆる小乗仏教）の時代になります。ことの起こりは十事（二五〇戒で禁止されているが実行しにくい十の事項）の例外を認める（大衆部）か否（上座部）かでした。厳格な上座部は、説一切有^{せついつさいう}部、正量^{しやうりやう}部、化地^{けじ}部など、寛容な大衆部は一説部、多聞部などに分かれます。上座部の仏教は、アショーカ王の王子マヒンダによってセイロンに伝わります。

部派仏教の時代には、盛んに阿毘達磨Abhidharma（＝法の研究）が作られました。これは、①仏説の蒐集、②分類整理、③語義解釈、④学説展開、を内容とします。こうした注釈をする比丘を、阿毘達磨師（＝毘婆沙^{びはしゃ}師）といいます。残念ながらこれら注解は、説一切有部（単に有部ともいう）のものを除いてほとんど伝わっていません。有部からは仏滅後三百年に迦多衍尼子^{かたえんにし}（カトヤーニープラ）が出て、有部の教理を大成、『発智^{はつち}論』を著します。紀元二世紀には、『発智論』の研究書『阿毘達磨大毘婆沙論』（200巻）が成立します。紀元4～5世紀には世親(Vasubandhu)が『俱舍論』を著します。

部派仏教の教理

今日、論蔵が完全に残っているのは、漢訳された有部と、セイロンに伝わった上座部のみです。上座部の論蔵は素朴で、阿含經から離れていません。いっぽう有部の教理は、複雑で思弁的な体系で、のちの大乘仏教に借用され、そのベースになりました。

説一切有部の学説は、「三世実有^{さんぜじつう}、法体恒有^{ほつたいこうう}」として知られています。これは簡単に言えば、現象は変化し続けるが、その変化を支配する法則そのものは不変の実体だ、という説です。他に依存しないで、それ自体で存在するものを、自性^{じしやう}と言いますが、ダルマ（法）はまさにそれであり、極微^{ごくみ}と言われる現象の究極の実体もそうです。（青い花瓶は壊れますが、花瓶の青さは粉にしてもなくなりません。その青さが極微です。）法には、有為^{うゐ}法と無為^{むゐ}法があります。有為法は自性を有しますが一刹那のみ現在に存在する、無住なる法にすぎません。それに対して無為法は、作られない法、常住の法（すなわち、涅槃）です。

縁起の思想はさらに精緻化され、十二縁起の思想となります。これは、無明→行→識→名色→六処→触→受→愛→取→有→生→老死の順に、人間の苦悩・輪廻が生ずるとするもので、これを逆に解体していけば、輪廻が生じないことになります。行為が後に残す力を業^{ごう} karmaといいます。業には善業／悪業／無記業（善でも悪でもなく果報をもたらさない業）の三つがあります。善業を積むのが修行ですが、それが可能となるのは、仏教徒が戒体（戒を受けることで生じる防非止惡の力）を備えているからです。戒体は、目に見えない業（無表業）のひとつです。（ほかに防非止惡の力は、禪定や覚りから生じます。）

部派仏教の世界観

もうひとつ、部派仏教の多くに共通するのは、五趣（六趣）の輪廻の考え方です。すなわち、有情^{うじやう}（＝人間＋動物＋神・天人）は地獄・餓鬼・畜生・（阿修羅・）人間・天上の六道を輪廻するという理論で、これら全体がひとつの世界です。こうした世界が千個集まって小千世界、小千世界が千個集まって中千世界、中千世界がさらに千個集まって三千大千世界となります。これが、仏陀一人の教化範囲とされます。（三千大千世界のなかに複数の仏陀が同時に存在することはできません。したがって別の仏陀が後から覚りを開いたら、三千大千世界の外にワープして、新たな仏国土を与えられることになります。）

小乗の修行の段階も、四向四果^{しこうしか}に整理されます。すなわち、見道（預流向^{よるこう}）、修道（預流果、一來向^{いちらいこう}、一來果、不還向^{ふげんこう}、不還果、阿羅漢向^{あらかんこう}）、無学道（阿羅漢果）の八つの段階です。阿羅漢は初め、釈尊の覚りと同等とみなされていました。次第に釈尊の覚りより劣るものと位置づけられて行きます。

言語ゲームとしての仏教

仏教徒であるためには、三帰依（＝我は仏・法・僧を敬したてまつる）を唱えること。（仏・法・僧を三宝といいます。）そして、五戒（殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒、飲酒戒）を授かることです。（Q：キリスト教徒であると同時に、仏教徒であることができるか？）さらに、出家して修行にはげれば完全です。

それでは、修行の目的とは何でしょうか？ 解脱して覚りを開くことです。では、覚りとは何か。覚ったあとでないと、それはわからない。ということは、仏教の修行者たちはみな、覚りが何か知らないまま修行を続け、仏教を成り立たせているのです。——これは不思議です。覚りがすばらしいから修行を続けるのではなく、修行を続けるから覚りがすばらしいことになる。これが「信じる」ことなのだと、考えてみることにします。

こう考えると、初期仏教を、幾重かの言語ゲームの複合として記述できそうです。（言語ゲーム language game とは、哲学者ヴィトゲンシュタインの言葉で、社会生活を成り立たせる行動様式のことです。）

(1)覚りを訊ねあうゲーム……解脱をめざして修行する人びとの言語ゲーム。
(2)釈尊を標本とする覚りのゲーム……釈尊が覚りを開いたと前提する修行のゲーム。
(3)釈尊の言説を伝持するゲーム……釈尊の入滅後、その言説を釈尊の代わりとする。
(4)釈尊の戒を持するゲーム……(3)のゲームをする修行者たちの集合＝サンガを確定する。
(5)戒＝律違反を告白しあうゲーム……修行の自発性と、サンガの集団秩序とを調和する。
このように考えると、初期仏教～部派仏教時代の仏教は、きわめて巧妙な組織原理をもった運動だったことがわかります。

こうした組織原理をもつサンガ（出家者のギルド）のあり方は、日本に伝わりませんでした。これに照らすと、日本仏教の特殊なあり方も理解できるし、たとえばオウム教団の特殊なあり方も理解できるのです。言語ゲームと仏教についてもっと詳しいことは、『仏教の言説戦略』（勁草書房、1986）を参照して下さい。

結論として言えることは、仏教がきわめて個人主義的な思想だということです。それは、こうした仏教がなぜ、日本では集団主義的（たとえば、宗旨は家単位で決まっている！）になってしまったのか？ これは宿題にしておきます。

☆次回（6月4日）は、「大乘仏教の世界：菩薩・般若・極楽浄土」を講義します。

☆小テスト（1／3）カヴァー……(1)教会に行こう！ 近所の教会の日曜礼拝（午前中？）に参加して「週報」など証拠の品をもらってくる。簡単な感想とともに提出して下さい。
(2)ホームページを探せ！ なるべく珍しい教団のホームページを探索し、感想とともに提出。
締切り：6月一杯メド 加點：6点～ 提出先：西4号館3階入口・橋爪の郵便受け。

キーワード……菩薩、仏塔信仰、般若波羅蜜、阿弥陀仏、法華經、曼荼羅

大乘仏教とは何か

大乘の修行に励み、将来の成仏を約束された人びとを、菩薩(Bodhisattva)といいます。それに対して、小乗の出家修行者を声聞しょうもん といいます。

大乘仏教とは、何でしょうか？ 大乘／小乗の区別を、日本人は一応知っています。しかし、日本には大乘仏教しか伝わらなかったために、その知識は公平ではありません。

大乘とは mahayama、すなわち「大きな乗り物」の意味で、小乗 hinayana（小さな乗り物）に対立します。西暦紀元前後に現れた大乘教団の菩薩たちが、それ以前の部派仏教に与えた蔑称が「小乗」（＝自分の解脱だけを考え、衆生の覺りを配慮しない）です。大乘教（その經典には、般若系、浄土系、法華經、華嚴系などがある）を広めた在家の修行者（菩薩）たちの実態は、あまりよく分かっていませんが、最初は仏塔（ストゥーパ）を拠点に活動していたようです。（後代には、大小兼学の出家集団も多くなります。）

仏塔信仰と大乘仏教

部派仏教は、出家の功德を強調する結果、出家＞在家という序列を当然としました。在家の人びとは、面白くありません。そこで、僧（サンガ＝釈尊の流れをくむ出家集団）と別に、仏（釈尊の墓＝ストゥーパ）を信仰する動きが盛んになります。

出家者（サンガ）は、（葬儀などの）世俗の活動を禁じられていますから、釈尊の葬儀は在家の信者が行ないました。そして、サンガと関係なしに遺骨（仏舍利）を埋葬して、ストゥーパ（仏塔）を建てました。（日本で墓のまわりに立てる卒塔婆そとば は、その由来を汲むものです。） 仏舍利は分骨され、インド各地の仏塔に埋められたほか、中国から日本にも伝わって、五重の塔の下に埋まってい（ることになってい）ます。インドで仏塔を管理したのは在家の人びとでした。仏塔にも布施が集まるので、仏塔を根拠地にする修行者が現れ、彼らが在家修行の重要性を強調した——これが、平川彰博士の唱えた大乘教＝仏塔信仰起源説です。

歴却れきごう成仏——在家修行の強調

出家修行者の集団（サンガ）は、釈尊自身が開いたものですから、在家修行の優越性を主張するには工夫が必要です。そこで菩薩たちは、釈尊が成仏した原因をこう解釈しました。釈尊が覺りを開くまで出家者として修行したのはたった6年間だったが、実はそれ以前に長い修行のプロセスがあった。仏陀の前生譚（ジャータカ）伝説を利用して、発願してから三阿僧祇あそうぎごう百却（≒10⁵⁸年）の修行があったと主張します。その大部分は出家者でなかったから、在家の修行こそが成仏の決め手だ、というのです。この考え方を歴却成仏といい、密教の即身成仏とは反対の考え方です。

それでは大乘の菩薩たちは、どんな修行をしたのでしょうか？ 彼らは自分たちを凡夫の菩薩と位置づけ、文殊、観音、弥勒みろく といった大菩薩を模範と仰ぎます。小乗の涅槃は灰身滅智かいじんめつち（死んだ仏陀は雲散無消する）ですが、大乘は不住涅槃ふじゅうねはん を説き、大菩薩は仏陀と等しい境地に達しながら、衆生済度しゅうじょうさいどのため涅槃に入らないで活動が続けると考えます。菩薩の修行は、布施（財物を施す）・持戒（大乘戒を守る）・忍辱にんにく（苦難を忍ぶ）・精進（勇敢に覺りをめざす）・禅定・智慧（＝般若）の六波羅蜜を基本とします。波羅蜜は「完成」の意味なので、般若波羅蜜は「智慧の完成」（後述する「空の思想」を指す）という意味になります。

初期大乘の經典

西暦紀元前後から千年近くにわたって、インドで数多くの大乘經典が編まれました。そのうちかなりのものはシルクロードを経て中国へ伝わり、漢訳されました。そうしたなかでは、般若經のグループ、特に『小品しょうほん般若經』『大品般若經』がいちばん古く、それに『金剛般若經』『般若心經』『理趣經』などが続き、これらはのちに『大般若經』六百卷にまとまりました。ほかに、『維摩ゆいま經』（在家の維摩居士が小乗の出家者を言い負かす）・『勝鬘しょうまん經』・『阿闍あしやく刹しやく国經』、『華嚴經』、『法華經』、浄土三部經（『無量壽經』『觀無量壽經』『阿弥陀經』）などが初期仏典として重要です。

般若教団（中觀派）の教理

大乘仏教の大成者に、龍樹りゅうじ (Nagarjuna)がいます。彼は2～3世紀ごろ、南インドの出身で、『中論』（空觀の書）、『大智度論』（大品般若經の注釈）、『十住毘婆沙論』（十地經の注釈）などを書きました。空觀くうがんとは、あらゆる事物（一切諸法）が空であり固定的な実体をもたないと観じる思想です。これは、説一切有部の法有（現象は一切実体を持たないが、その法則性そのものは不変の実体である）の立場のさらに上を行くものです。空sunyaは無と違い、「有でもなく、無でもない」ののですが、一切を空とみる空觀によれば、「本来が空である煩惱を断滅することもありえない」という極端な主張になります。覺りたい、仏陀に成りたいと考えているうちはダメだ、というわけですね（『般若心經』にもそう書いてあります～プリント参照）。仏陀を、極限的な到達点ではなく、そこに至るプロセス全体（菩薩行）として再定義し、（完全な出家でもない、かと言って完全な在家でもないまま）能動的な修行態度を獲得するのが、般若教団のテーマです。大乘の教えはすべて、この空觀を踏まえています。

般若經典の語法は独特で、対立する両方を否定します（自分の立場をポジティブに述べません）。八不はつふ（不生不滅、不常不断、不一不異、不来不去）がそれです。

多くの仏陀たち

バラモン・ヒンドゥー教から見れば、釈尊は、数ある神々・覺者たちの一人にすぎません。そうした見方は仏教にも徐々に浸透し、釈尊以外の仏陀がいた（いる）という考えとなります。まず、仏伝文学のなかの燃燈仏。釈尊は修行の途中でこの仏に会い、将来の成仏を約束されます（授記）。彼に照らされて以後、修行の道を歩いたというのです。燃燈仏は過去仏ですが、それ以外にもつけ加えられ、やがて過去七仏が信仰されるようになりました。いっぽう、仏陀は広大な三千大千世界を教化範囲とするという考え方から、釈尊のほかに仏陀がいま現存する（現在他仏）という発想には抵抗がありました。

最初に現在他仏を唱えたのは、小乗・大衆部の十方世界一仏多仏論と言われます（他の部派はこれを、非仏説（インチキ）だと攻撃しました）。三千大千世界がいくつもあり、それぞれに仏陀がいるというのです。大乘はこれを受け、東方・妙喜国には阿闍刹あしやくしやくが、西方・極楽には阿弥陀仏が住する、などの信仰をうみ出しました。十方の仏陀を觀ずる『般舟三昧はんじゅさんまい經』が行なわれ、それぞれの仏陀の仏塔や仏像も作られました。

浄土教団と阿弥陀信仰

阿弥陀仏は、Amitabha（無量光）、Amitayus（無量壽）の音訳で、“壽命無限の光り輝く仏陀”という意味です。今日の研究によると、その実体はイラン（インドの西方！）に広まっていた拜火アスター教の神（アフラマズダ）で、それが仏教化したものです（ですから浄土宗は、仏教のなかでも一神教に近いのです）。また極楽は、チグリス川河口に実在した小島と言われます。極楽はのちに、浄土でもあると考えられるようになります。

阿弥陀信仰は、阿弥陀仏の仏国土（＝極楽）に往生（＝転生）して、そこで成仏しようというものです。ごく初期の『大阿弥陀經』（『無量壽經』の呉訳本）では、①六波羅蜜の修行者、②仏塔信仰者、③念仏を唱える者、が極楽往生するとされますが、のちの經典では①、②が除かれ、③だけ（念仏が極楽往生の必要条件）になります。

浄土經典によれば、阿弥陀仏の前身・法藏ほうそう菩薩はその昔、世自在王せじざいおう如来に対

して四十八の誓願をしました。その第二十二願に「われ仏となるとき、他方の仏土の諸々の菩薩衆、わが国に來生せば……必ず一生補処いっしょうふしょ（つぎに生まれるときは成仏できる修行ランク）に至らしめん」とあります。そのあと成仏し、阿弥陀仏となつたのですから、約束どおり極樂に往生すれば、歴却の修行など必要なく、成仏が保証されるというわけです。極樂は、宝石の樹が生え、妙なる音楽が流れ、修行には最適の場所とされます。阿弥陀仏の寿命が尽きたあとを、観音菩薩→勢至菩薩と継ぐことになっており、この二つを本尊とあわせて阿弥陀三尊と呼びます。

法華經と法華教団

法華經（妙法蓮華經）は、“白蓮のごとく正しい教え”という意味で、鳩摩羅什くもらじゅうの漢訳が有名です。全部で二七（羅什訳は二八）品あり、いくつかの段階をへて、紀元前後に徐々に完成しました。この經典を伝持していた教団は、仏塔信仰を重視し、他の教団と厳しい対立関係にあり、經卷をも信仰の対象とした点が特徴です。声聞・緣覺・菩薩の三乗はそのまま一仏乘であるとする会三歸えさんきいつ（開三顯一）の思想、釈尊は永遠の昔に成仏し今も靈鷲山りょうじゅせんに住するという久遠実成くおんじつじょう仏の信仰を説きます。

法華經の前半を迹門しゃくもんといい、第三・譬喩の品（他の經典は方便で、法華經が本物であるという「火宅の譬」）、第十一・見宝塔品（多宝如来が出現する）、第十二・提婆品（惡人・女人成仏を説く）などを含みます。後半を本門といい、第十五・從地涌出品うちゆしゅつぽん（大勢の菩薩が現れる）、第十六・如来寿量品などを含みます。

華嚴經と華嚴教団

『華嚴經』は、単独だった經典を四世紀ごろ、中央アジアで編纂したもの。そのテーマは、多様に展開した大乘の諸仏・思想を、どのように統合するかであると言えます。初期の華嚴思想を表現した『十地經』（のちに第二十二・十地品）は、十の数を重視し、菩薩の修行段階を十地に分けます（但たん菩薩道）。

華嚴經は、黙坐する毘盧遮那びるしゃな Vairocana 仏（＝釈尊）の面前で、普賢ふげん、文殊などの菩薩が説法するかたちで進みます。彼らは無限の過去時に一切智性いっさいちしやうを求めて永遠の行を踏み出したもので、彼らが獅子奮迅（外道や他の二乗に勝る、の意味）三昧に入ると、宇宙の実相が蓮華藏莊嚴れんげそうしやうこん世界として顯れ、無数の菩薩が修行を続けている様が明らかになります。この世界は、法身ほっしん毘盧遮那仏（宇宙大の巨大な仏陀の身体）にほかなりません。（だから華嚴宗では、大仏を作ります）

普賢行ふげんぎやう（無量却の修行）が、すべての菩薩の歩む道です。そのコースを、善財童子ぜんざいどうじも歩み始めます。彼は文殊菩薩に触発されて、求法遍歴を開始し、53人の善知識を訪ねます。弥勒菩薩のもとでは、菩薩たちの衆生利益りやく（ボランティア活動）の様子を観じます。最後に文殊菩薩は、行により普賢法界ほっかいに入るべきことを教えます。華嚴の思想はあくまでも、三却成仏・歴却成仏を主張します。

曼荼羅と三身説

華嚴教団は曼荼羅まんだらも重視します。曼荼羅とは“すべての要素がひとつも欠けることなく具足した総体”、すなわちこの世界の実相を意味します。華嚴經では、一種リアリティの逆転が起こっており、從來なら「現実世界のなかで、成仏をめざして修行を続ける」と考えていたところを、「修行を続けるからこそ、現実世界がこのように現れてくる」と考えます。すべては仏性の顯現なのです。華嚴の教えによれば、空くうとは、「世界が、一人の人間の主体的条件（信・願・行）により、幻のように顯現し、維持されること」となります。報身ほうじん・法身ほっしん・応身おうじんの、仏の三身さんじん説も、華嚴の思想です。報身は覺りの結果この世に出現した仏陀の具体的なかたちのこと。成仏した人間は報身として、仏国土を与えられます。法身は、法そのもの。応身は、衆生の求めに応じて現れる仏陀のかたちで、法（經）のなかで説かれているものです。

密教の世界：胎藏界と金剛界

密教は、ヒンドー教化した仏教で、『大日經』（7世紀半ば西インドで成立）、『金剛頂經』（7世紀末成立）が主要な經典です。密教のテーマは、「修行を続けるから仏陀となる」という常識を、「仏陀であるから修行が続けられる」と逆転することです。仏陀ですからも修行は必要なく、自分が仏陀であると確信すればよいことになります。

『大日經』は、中尊：大日如来（＝毘盧遮那仏）を中心とする胎藏界曼荼羅として世界をとらえます。毘盧遮那は説法して、初発心から覺りに至り、毘盧遮那仏としての報身をえたこと、智慧（般若）を完成させたあと、慈悲を発揮して、加持（神秘的な呪術力）・神変を発揮していることを説法します。大日經の修行は、一尊瑜伽、すなわち、曼荼羅の中の一尊を三密（身・口・意の三業の働き）加持で模倣することで、その尊と自己とを瑜伽することです。この段階ではまだ、即身成仏は否定されています。修行を続ける励みとして、覺りの境地をちょっと体験するというのが、一尊瑜伽の趣旨です。

いっぽう『金剛頂經』は、即身成仏を主張します。「オウム、一切の如来たちがある如くに我はあり」と仏身円満の真言（呪文）を唱え、三昧耶さんまや印（手）・法印（真言）・羯摩印を結ぶと、“象徴されるものと象徴それ自体とは同一である”という密教の宇宙方程式によって、即身成仏が果たされます。金剛頂經の金剛界曼荼羅は、中尊：毘盧遮那を中央に、一切如来（阿閼、宝頂、阿弥陀、不空成就、ほか）を周囲に配したものです。

密教は、仏教の最新バージョンとして中国に伝わり、空海がそれを日本に伝えて真言宗を開きました。

タントリズムの世界

密教はその後、ヒンドゥー教と混淆して、インドから仏教は消えてしまいます。

密教の流れをくむタントリズムは、尸林しりん（墓地の裏手の荒れ地）で男女抱合の儀式を行ないサンヴァラ（性的合一による至高の快樂）を得る、という怪しげなものでした。地面の上に曼荼羅を描き、般若＝女性、方便＝男性、菩提心＝男女の抱合、という象徴方程式を立てて、集团的に男女が抱合します。この儀式専門の、荼枳尼だきに という秘教集団の女性もいました。このように性的快樂を、密教にいう成仏を確信する方法に採用したのがタントリズムです。そのほかに、殺生・妄語・盜・淫・糞尿食……など、仏教の戒と反対のことを故意に行なう修行法まで現れました。

中国・東アジアの仏教

インドでは、經典とそれを伝持する教団とがきちんと対応していましたが、中国にはばらばらに經典が持ち込まれて訳されたので、混乱が生じました。そこで、どの經典が大事か判定する教相判釈きやうさうはんしゃく（略して教判）が行なわれます。教判には諸説があり、さまざまな宗派をうみましたが、天台宗の開祖・天台智顗ちぎは經典を成立時期別に五つに整理します（五時教判）。華嚴時（覺りの直後に華嚴經を説いたが、レヴェルが高すぎた）→鹿苑時（やさしい阿含經を説いた）→方等時（維摩經、勝鬘經を説いた）→般若時（般若經を説いた）→法華涅槃時（法華經、涅槃經を説いた）の順に釈尊が説法したと考え、法華經をほかの經典より上位に位置づけるのが天台宗の教義です。これを、最澄が日本に伝え、南都仏教に対抗する比叡山延暦寺を創建しました。

□参考文献□

平川彰ほか編『講座大乘仏教』（全10巻）春秋社。～大乘各教派の成立と展開を解明。
平川彰 1964『原始仏教の研究——教団組織の原型——』春秋社 ～戒律の機能を解明。
平川彰 1968『初期大乘仏教の研究』春秋社 ～仏塔信仰が大乘仏教の起源であると解明
中村元『ナーガールジュナ』（人類の知的遺産13）講談社 ～「空」について最高の解説
陳舜臣『曼陀羅の人』（上・下）TBS/TVカ ～空海を主人公とする出色の小説

☆来週（6月11日）はイスラム教を講義します。

キーワード……ムハンマド、ウンマ、ヒジュラ、ジハード、コーラン、スンナ

イスラム教をめぐる誤解

キリスト教徒が全世界で約10億人なのに対して、イスラム教徒は手堅く見積もって5億5千万人。その内訳は、アラブに3000万人、西アジアの非アラブ圏に6000万人、アラビア語を話すアフリカ圏に7000万人、それ以外のアフリカに6000万人、インド近辺に1億5千万人、東南アジアに1億人、旧ソ連に3000万人、中国に1500万人、バルカン半島に500万人などとなっています。(10億人という説もあります。)

日本にはイスラム教徒があまりいません。そのため、いろいろな誤解がまかり通っているようです。回教とかマホメット教とかいった、誤った呼び方をする人もまだいます。

誤解としてはたとえば、①イスラム教＝アラブの宗教、というもの。②イスラム教はアラーの神を信ずる宗教、というもの。③「片手に剣、片手にコーラン」、④砂漠の宗教、などのイメージ。⑤ホメイニ師はイスラム僧……、などの誤解と、いろいろあります。③は、キリスト教の宣伝文句ですが、戦闘的だったのはキリスト教のほうなのです。

ムハンマドの生涯

イスラム教は、預言者ムハンマド(570-632)によって創始されました。

当時のアラビア半島は、混乱の最中にありました。商業は盛んでしたが、部族抗争が相継ぎ、流血が絶えません。また、ユダヤ教、キリスト教、偶像崇拜などが入り乱れて、宗教的にも混乱していました。

ムハンマドはメッカの町に、名門クライシュ族の一員として生まれます。生前に父、6歳で母と死別した彼は、伯父の庇護のもとに商人となり、富裕な商家の末亡人ハディーシャの隊商を任されて期待に応え、年上の彼女と結婚します。3男4女の父となりますが、男児はみな夭折しました。やがて人生の意味を思い悩むようになり、砂漠で瞑想、ネストリウス派などのキリスト教に触れたりもします。

神の啓示と苦難

そしてムハンマド40歳のとき、ついにメッカ郊外のヒラー山上で、大天使ジャブライールから神の啓示を受けます(以後彼は、20年にわたって啓示を受け続けます)。妻は預言者を道を進むよう、彼を励まします。彼は布教を始め、妻や友人のアブー＝バクルなどの信者を得ます。しかし、メッカの人びとは彼を敵視し、迫害があいつぎ命さえ危険な状態になります。(天使に連れられて、一夜のうちにエルサレムに飛び、そこから昇天してイエス、モーゼ、アブラハムに会って帰ってくるという奇蹟を体験するのもこの頃です。)

622年、彼は信者とともにヤスリブ(いまのメディナ)に逃れます(ヒジュラ＝聖遷)。この年がイスラム紀元(ヒジュラ歴)の元年です。この地でムハンマドは、ムハージールン(移住者：メッカから移住してきた信者)のみならず、多くのアンサール(援助者：メディナで改宗した信者)を獲得して、教団の基礎を固めます。そしてメッカに戻るクライシュ族の隊商を襲撃、敗走させます(バドルの勝利)。その後の戦闘を有利に進めたムハンマドは630年、メッカに無血入城、カーバ神殿の偶像を打壊し、奴隷(＝メッカ住民)の解放を宣言します。アラブの諸部族は進んで盟約を求め、イスラム共同体(ウンマ)が形成されていきました。

ムハンマドは、急速に拡大するウンマを指導し、異教徒との戦い(ジハード)を指揮しますが、まもなく病をえて、632年にメッカで死去します。

イスラム教の教理

ムハンマドの唱えたイスラムの教えは、タウヒード(神の唯一性)ということばに要約できます。これは、キリスト教の三位一体との対抗を意識したものでしょう。

神アッラーは、唯一絶対永遠の神。全知全能の創造主で、復讐と慈悲の神、最後の審判の裁き主。生まず生まれず、不可見で、姿なく形なく色なく部分なく、始めなく終わりない、不変不易の存在。耳なしに一切を聴き、目なしに一切を見る。アッラーの言葉は永遠不滅であるといえます。アッラーに仕えるのは、天使たち。天使たちは、光から作られ、男女なく老若なく、飲まず喰わず生まない。人間の行動を記録し、裁判の材料とします。さらに幽鬼(ジン)は、火焰から作られ、男女あり生殖あり善悪あり、の生き物です。

イスラム教も最後の審判を信じます。神はその日、死者をよみがえらせ、一人ひとりを生前の信仰と行為によって裁いて、天国または地獄に送ります。

ムスリムの務め

イスラム教には、五つの柱(ムスリムの務め)があります。第一は礼拝。一日に五回、メッカのカーバ神殿の方角に向かって礼拝します。その方角を示す印を、キブラといいます。第二はザカート(喜捨)。第三は、断食(ラマダーン)。毎年イスラム歴9月の一箇月間、昼間は食事や飲み水をとることができません。ただし、(1)病人や旅人、(2)妊婦および授乳中の婦人、(3)老衰者、は断食を免除されます。イスラム歴は一年が354日なので、西暦とのあいだに百年で三年の誤差が出ます。第四は、メッカ巡礼。一生のうち一度は、メッカに巡礼に出かけるのがムスリムの務めとされています。毎年メッカには数百万人が集まります。これに、信仰告白を加えて、ムスリムの五つの務めとします。

以上の五つの柱がムスリムの、儀礼的な神への務めとすれば、実践的な神への務めとして、ジハード(聖戦)、シャリーア(イスラム法)の遵守があげられます。ジハードは、戦争に限らず、イスラム教を発展させる努力をいい、その途上で倒れたムスリムには天国が約束されます。イスラム法は、聖典『クルアーン』その他の定める法規をいい、豚肉、賭博、飲酒、利子(リバー)の禁止や複婚の承認など、さまざまな生活規定を含みます。

ムスリムの構成する人類大の社会が、ウンマ(イスラム共同体)です。すなわちウンマとは、唯一神アッラーを究極の主権者、使徒・預言者ムハンマドをその地上における代理人と認めるムスリムたちの組織する、宗教共同体です。

正統カリフの時代

イスラム教は、モーゼやイエスを預言者と認め、ユダヤ教徒、キリスト教徒を「啓典の民」として尊重します。ムハンマドは、最後で最大の預言者、神の使徒として、新たな啓示をもたらし、地上で宗教的、政治的権威を兼ねそなえた存在として君臨しました。(ただし彼は、ただの人間であることが強調され、彼個人を崇拝するいかなる試みも厳しく禁じられています。)ムハンマドの死後、その宗教的権威を継ぐ者はいませんが、政治的権威を継承してウンマを統率する者として、カリフ(神の使徒の代理人)が選ばれます。

ムハンマドの死後、叛乱や偽預言者の活動によって、ウンマは解体の危機に瀕します。ムハージールンとアンサールの反目もありましたが、長老会議でアブー＝バクルが初代のカリフに選出されます。彼の没後、ウマル→ウスマーン→アリーが順にカリフの位を継承します。この4名を、正統カリフといいます。この間に、イスラム教徒は広大な領土を獲得しました。

ウマイヤ家のウスマーンが暗殺されたあとに立ったアリーも、661年に暗殺されます。かわってカリフになったのは、ウマイヤ家のムアウィアで、以後14代にわたるウマイヤ朝が始まります。いっぽう、熱烈なアリーの支持者は、アリー(とムハンマドの娘ファティマ)の血統を正統カリフ(イマーム)と認めるシーア派となりました。これに対して、シーア派でないムスリムをスンニー派といいます。

『クルアーン』の成り立ち

ムハンマドに下された神の啓示『クルアーン』がいまの形に編纂されたのは、第三代のカリフ、ウスマーンの時代のこと。以後、誰の手も加えられていません。この点、仏教やキリスト教、ユダヤ教の聖典に比較しても、テキストの成立は信頼が置けます。

イスラム教の教義によると、アッラーの手元に原本『ウンム＝アルキターブ』(天の銘版)があり、それが大天使ジャブライールの手でアラビア語に翻訳されて、ムハンマドに

読み聞かされました。ムハンマドは、今日でいう癡癡だったらしく、時折毛布をかぶって意識を失い、神の啓示を口走ります。それを傍らで筆記して、もれなく集めたのが『クルアーン（コーラン）』です。

『クルアーン』は 114章からなり、排列は、啓示とはば逆の順番になっています。『クルアーン』の翻訳や解説は、聖典と認められないので、世界中のムスリムはアラビア語を学習し、アラビア語が彼らの共通語になりました。旧約聖書や新約聖書からの引用も豊富で、キリスト教やユダヤ教に対する論争的な部分もあります。

イスラム法とはなにか

人類普遍の法であるイスラム法に忠実に従った生活を送る——これが、ムスリムの基本です。イスラム法は聖典『クルアーン』を根本に、それ以外の法源にもとづいてイスラム法学者が構築したものです。その組み立ては、ユダヤ法とよく似ています。

イスラム法によると、人間の言動はすべて、イスラム法のなかに対応する判断(hukm)を持ちます。法判断は、該当する明文（法源）から直接・間接に導かれます。法源から法判断を導くのが法学の仕事です。

西欧には、人間が法律を作てよい、という考え方があります。議会がまず立法を行い、法律ができます。それを解釈・運用するのが法学者の仕事です。しかしイスラム教にになると、法律は神が作ったもので、永遠不変です。その法律を発見するのが法学者です。法学者がいなければ、法律もないわけで、彼らの社会的な地位はきわめて高いのです。

イスラム法の法源

イスラム法の法源は、全部で10種類ありますが、大事なものは最初の4つです。

第一法源は、『クルアーン』。神の啓示がそのまま、人間との契約＝法になります。

第二法源は、スンナ（伝承）。使徒ムハンマドの行為・言葉が、今日まで伝承され、法源となっています。『クルアーン』で解決のつかないことの多くが、これで解決します。

第三法源は、イジュマ。新しい事態が生じて法判断に困る場合、イスラム世界のすぐれた法学者（ムジュタヒド）全員に手紙で呼びかけて、返事をもらい、その一致があれば以後、それが法源となってムスリム全体を拘束します。

第四法源は、キヤース。明文がなくて判断に困る場合、法学者が論理的な推論によって判断を下すことです。ただし、英米法の場合、ある判事の判断は判例としてほかの判事を拘束するのですが、イスラム法の場合、キヤースはほかの法学者を拘束しません。判例として法学者を拘束できるのは、ムハンマドの下した法判断だけです。

イスラム法の体系は、千年も前に成立しましたが、現代数学と同じ公理的構成(axiomatic construction)をとっています。ローマ法の影響もあるようですが、形式的に完備した法によって、多民族・全人類規模の共同体をつくりあげたのは驚嘆に値します。

クルアーンとスンナ

『クルアーン』が法源として正当なのは、それが神からのものだからです。それは、①神でなければ不可能なほど完璧な作品だから、②『クルアーン』のなかに、もし疑うなら人間が作ってみよと挑発があるのに誰も作らなかったから、などで証明されます。『クルアーン』には、(1)信条的規範（ムスリムが信すべきこと）、(2)倫理的規範（ムスリムが行なったほうがいいこと）、(3)行為規範、の三種がありますが、(3)のみが法規範です。

スンナとは、神の使徒（ムハンマド）から出た言葉・行為・承認です。スンナの伝承には、イスナード（伝承の鎖）がついており、その違いでスンナの信頼性に差が出ます。ムタワールティルのスンナ（大勢の人びとが使徒から伝え……現代に伝わったスンナ）が、もっとも信頼のおけるスンナです。例をあげるなら、

ウマル・イブヌ＝ラフマーンの子、アブー・アブドゥ＝ラフマーン——アラーよ彼ら両名を嘉したまえ——の権威による。彼は伝えている。「私はアッラーの御使——アッラーよ彼に祝福と平安を与えたまえ——がこう言われたのを聞いた。

イスラームは五つの〔柱〕の上に建てられている。つまり、アッラー以外に神はなく、

ムハンマドがアッラーの使徒であると証言すること。ならびに礼拝を行ない、喜捨を払い、〔アッラーの〕家に巡礼し、ラマダーン月に断食することである。

この伝承は、アル＝ブハーリーとムスリムの二人が伝えている。～『40のハディース』

スンナを編纂した書物を、ハディースといいます。これは、預言者（ムハンマド）の伝承のことで、多くの法学者によってハディース集が編纂されました。

イジュマとキヤース

第三法源のイジュマとは、使徒没後のある時代に、すべてのムジュタヒド（イジュティハードを行なう資格のある法学者）が全員一致で示した判断のことです。後代の法学者は、これを覆すことはできません。ムジュタヒドは、『クルアーン』およびハディースに精通している人びとで、イジュティハード（法源から法判断を導く努力）を行なって、質問に回答します。

キヤースは、明文のない事件と明文のある事件を、明文に示された判断で結合することです。キヤースには、「基本」と「枝」があります。例をあげれば、基本＝ブドウ酒（飲んではいけない）、枝＝ナツメヤシ酒、があった場合、その禁止の理由（酔っぱらうからいけない）をあいだに挟めば、ナツメヤシ酒も飲んではいけないと結論できます。これがキヤースです。

四大法学派

イスラム法の体系が今日のかたちになるまで、いくつかの段階がありました。①ムハンマドの存命中（使徒の時代）は、法規範は神と使徒の判断、法源はクルアーンとスンナのみ。つぎに、②教友の時代は、法規範は①＋教友（ムハンマドの友人）たちのファトワー（文書で提出される意見）と裁決、法源は①＋教友たちのイジュティハード。教友たちも死に絶え、③後続者たちの時代となって、法規範は②＋ムジュタヒドたちのファトワーや裁決、法源は②＋指導的ムジュタヒドたちのイジュティハード、ということになります。

イスラムの法理論を確立するのにもっとも貢献したのは、イマーム・シャーフィーという学者で、ヒジュラ暦 204年の没。そののちもハディースの収集や法体系の整備が続けられ、ハナフィー派、マリーキー派、シャーフィー派、ハンバリー派の四大法学派に分かれました。そのほかに、シーア・十二イマーム派もあります。ムスリムはこれらどれかの法学派に属することになっていて（国や地域ごとにだいたい学派が決まっている）、裁判でもそれぞれの学派ごとに異なった法が適用されます。

四大法学派も、いくつもの派に分かれています。ハンバリー派の流れをくむワッハーブ派は、18世紀のアブドル・ワッハーブが創始した学派で、サウジアラビアで有力であり、飲酒の禁止、イスラム法の厳格な適用など、保守的な主張で知られています。

イラン・イスラム革命

イランのパーレビ国王は、欧米型の急速な近代化・産業化を進めていました。そのためホメイニ師をはじめとするイスラムの法学者を弾圧したので、彼ら法学者の指導によるイラン・イスラム革命が起こりました。彼らの主張をひとくちで言うなら、「よくも近代化して、イスラム教の原則を台なしにしてくれたな」というものです。イスラムの原則に忠実なイスラム原理主義が、過激なテロと結びつくのではと欧米社会は恐れています。

☆次回6月18日は、「儒教とは何か」を講義します。

☆期末テスト（持込み可）を7月16日（金）の授業時間に実施する予定です。

参考文献

アブドゥ＝ワッハーブ・ハッラーフ 1984『イスラムの法——法源と理論』東京大学出版会

中村廣次郎編 1985『講座イスラム（全4冊）』筑摩書房

嶋田襄平 1978『イスラム教史』（世界宗教史叢書5）山川出版社

牧野信也訳 1993-1994『ハディース（上）（中）（下）』中央公論社

キーワード……礼、徳治主義、士大夫、天命、易姓革命、四書五経、理／気

中国社会の基本構造

儒教は、中国独特の思想です。まず中国とは何かについて、理解しておくべきでしょう。

中国は、単一民族ではありません。中国を、日本のようなひとつの国と考えるより、二個の世界と考えるべきです。それに匹敵するのは、ヨーロッパでしょう。ヨーロッパは、地中海とアルプス山脈に隔てられて、民族統合が進みませんでした。文化的にはキリスト教という共通項をもっています。いっぽう、大平原で移動の自由な中国は、儒教を軸に多くの民族が融合し、漢民族（中国人）を形成しました。

儒教の根本は、差別道徳です。中国は、底辺における宗族（父系の血縁集団）、頂点における官僚機構の、二種類の間関係からなります。修身→齐家→治国→平天下という順序は、宗族のうえに集権的な国家機構が位置する関係を表しています。親を大事にし、そのつぎに兄弟や身内、それから他の人びとに及んでいく差別的な儒教道徳は、こうした社会構造と調和しています。戦乱の続く中国では、宗族は安全のために不可欠なのです。

宗族(そぞく)は、父系血縁集団 (patrilineal descent group)です。日本にはないので理解しにくいですが、祖先崇拝を行なう数百～数万人規模の集団と考えてください。中国では血縁関係が強力です。それと官僚機構を絶縁するため、科挙や宦官が導入されました。そのどちらも日本に入りませんでした。それは日本に宗族がないからです。



都市国家から帝国へ

儒教は、古代中国の戦乱の時代に生まれた思想です。その社会背景を理解しましょう。

中国の歴史は、漢民族が周辺民族を同化し、膨張していく過程です。中国で最初に都市国家が現れたのは、黄河の上流域。以後、千年以上をかけて、それが華中→華南に拡大していきました。華南の米作文化は、城壁をつくる習慣がなかったのです。

殷の遺跡は、巨大な城壁と祭儀場で特徴づけられます。城壁は版築（粘土を練り固めた煉瓦）で作ります。それに代わった周（もとは殷に同化した西方の遊牧民）は、王族がトルコ系、民衆はチベット系だったらしく、王と諸侯（王の一族や有力氏族）が要塞都市を約1000建設しました。大きな都市は城（内側）、郭（外側）の二重の城壁をもち、国／都／邑の序列がありました。社会制度は封建制で、都市は封土（諸侯に与えられた土地）を持ちます。ほかの都市は王が同族を派遣して治めさせましたが、やがて諸侯化します。社会階層は、王・諸侯と貴族（その血縁者）／庶民（農民・職人・商人）／国人（被征服民）／野人（都市外に住む）のように、複合的でした。都市国家はその周辺を治めるのみで、あとは原野が広がっていました。周も、祭政一致によって統治されていました。

新興階級の台頭

春秋→戦国にかけて、大きな社会変動が起こります。都市国家が崩壊し、より広い範囲で統合され、領土国家→帝国（秦・漢）が成立していきます。戦闘方法も変化し、都市内に「里」という単位で住んでいた農民は、民族的に結束し、「士」と称して戦争に参加しました。歩兵が増加（野人も参加）し、騎兵軍団も登場します。それにとまって、貴族が没落し、新しいタイプの士人が登場します。孔子もこの階層の一員でした。彼らは周初の「天」のイデオロギーを再評価する新思潮を信奉しましたが、これが儒教でした。

当時の中国は、奴隷制で、諸侯は家内奴隷を抱えていました。男性の家内奴隷を臣、女性を妾といいます。諸侯の家内奴隷は、次第に側近と化し、権力をふるい始めます。する

と奴隷でないのに、自発的に臣になろうとする者も出てきますが、これを宦といいます。新しいタイプの士人は、こうした人びとでした。彼らは、宰相（周公旦）を美化して理想とし、血縁にもとづかない（教育にもとづく）人材抜擢が国家を強化すると主張します。いっぽう大夫は、新興地主で、士・大夫の両階層が台頭していったのです。

孔子の生涯

中国史上、最初の知識人・孔子（前552-479）は、こうした時代に出現します。彼は、姓は孔、名は丘、字を仲尼。春秋時代の末期、魯（現山東省）の曲阜に生まれます。魯は、周の建国の功臣・周公旦の子が興した国でした。父は叔梁紇、母は顔徴在、父は士の身分でしたが、二人は結婚していませんでした。孔子は子供のころから苦労し、さまざまな職を転々として育ちます。青年時代、下っ端の役人（倉庫、牧場の番人）になります。二十歳の頃結婚、息子の鯉が生まれます。36歳のとき、魯の昭公が亡命するのに従って、特に家臣ではなかったのですが、齊国に随行します。のち帰国、孔子学団を形成します。息子の鯉もやがて死に、孔子52歳のとき魯の官僚になります。外交で一定の成功を収めるものの、国内改革を試みて失敗、挫折します。そののち魯を去って衛に、さらに曹→宋→鄭→陳→衛→陳→蔡→楚→衛をへて、魯に帰国します（56～69歳）。途中、反対派に襲われて殺されそうになったり（陳蔡の難）、帰国直前に弟子の顔回が死んだりなど、苦難が続きます。多くの弟子を指導しつつ学問を続け、哀公十六年の4月、74歳で病死しました。

孔子の業績

孔子の最大の業績は、古い文書を編纂し儒教の古典として残したことです。

儒教の古典を、四書五経と称しますが、これは後代の朱子による呼び名。五経をすべて孔子が編纂したと伝えられていますが、事実ではありません。まず易経は、八卦占いのやり方がまとめてあり、春秋・戦国期に行なわれていた占いの集成です。書経は、王たちの公的言辞の集成で、古文は魏・晋代の偽作、今文きんぶんは戦国後半期に編纂されたものとみられます。詩経は、祭祀などの折に歌う歌詞を集めたもので、後世、孔子学派の人びとに蒐集されたものです。礼記らいきは、儀式の次第書きで、周礼は漢代の作、礼記、儀礼ぎらいも孔子以降と作とみられます。春秋は、魯の古記録にもとづいて歴史を記したもので、戦国時代、孟子などの手で採用されたものです。いずれにせよ、こうした編纂事業は孔子が先鞭をつけたもので、慣例を示す多くの事例が蒐集されました。

もうひとつの業績は、弟子の教育です。彼らを官僚として諸国に売り込むため、孔子は弟子たちに文字、言語、朝儀、礼法、音楽、弓術などを教え、学校は職業紹介所も兼ねました。礼とは、政治制度の意味で、こうした共通項がないと、民族・出身・文化的背景がまちまちな当時の官僚は、統制がつかないのです。

孔子の思想

日本でなじみの深い論語は、弟子がまとめた孔子の言行録です。學而篇～堯曰篇まで二十篇あり、三系統のテキストを合体したもの。その中心思想は仁、すなわち、忠恕（まごころと思いやり）をともなった人間らしさの徳を説くものです。支配層の政治的努力と倫理性（仁）によって、安定した国家経営が実現できるという徳治主義の主張が、儒教の根本です。さらに儒教は差別道徳の立場に立ち、家族や血のつながりを大事にしますが、これは墨子の兼愛説（不特定の人に対して奉仕しよりよい関係を作ることを強調する説）や楊朱の自己愛説（人間は自分しか愛せないというリアリズム）に対立します。さらに孔子は、「述而不作のべてつくらず」とする伝統主義の立場も強調します。述べるとは、先輩から教わったまを伝えること。これを先王の道と称します。新興の士階級が、こうした伝統的支配者の文化を身につけうるとした点が、革新的なものでした。

儒教が中国の正統思想となったのは、政治がよければすべてが解決するという政治万能主義にありました。孔子は「怪力乱神を語らず」とのべ、死後の世界や超常現象について

発言しませんでした。中国では、人間関係がすべてです。祖先崇拜は、確定した過去の人間関係によって、不安定な現在の人間関係を整序しようという試みと理解できます。聖人（古代の政治家）を理想化するのも、同じ伝統主義の現れだと考えられます。

儒教のテキストについて

ここで儒教のテキストについて整理しておくと、もっとも権威の高いテキストは経で、「孔子以前から存在していた古典で、孔子の手によって編纂されたもの」です。これにつぐランクの伝は、「孔子自身、及び孔子以後の学者の所説」です。これら経伝の欄外に附せられた第一次的な解釈を、注といいます。注をさらに解釈し、必然的に経伝の本文も及び第二次的な解釈を、疏といいます。これらは論理的で、問答体のものもあります。

漢代の五経は、易・書・詩・礼（儀礼）・春秋（経文のみ）を指しました。論語は伝のひとつです。唐代の五経は、毛詩・尚書・周易・礼記・左伝で、これに儀礼・周礼・公羊伝・穀梁伝を加えて九経ともいいました。宋代の十三経は、易经（周易）・書経（尚書）・詩経（毛詩）・周礼・儀礼・礼記・春秋左伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・論語・孝経・爾雅・孟子をいいます。朱子学は四書五経を掲げましたが、ここで四書とは論語・孟子・大学・中庸をいい、後の二書はもともと礼記の一部が独立したものです。

孟子の生涯

孟子（前370?-290?）は戦国時代、鄒の国（現山東省）に生まれました。姓は孟、名は軻、字は子車といいますが、生い立ちも青年時代もはっきりしません。三十代、孔子の孫弟子に儒教を学ぶいっぽう、淳于髡の弁論術、宋鈞、尹文ら原始道家の思想、墨子の実用主義、楊朱の自愛説（感覚論的個人主義）など、諸子百家思想の影響を受けました。順次、梁の恵王→齊の宣王→滕の文公の国政顧問となり、井田制など自らの政治思想の実現に努力しますが、果たさぬまま引退して死亡します。子供のころ、墓場の裏→市場の脇→学校の隣に引っ越したという孟母三遷の故事は伝説です。『孟子』は、古くは孟子の著作と信じられましたが、弟子や孫弟子の記録を編集したもののようです。

孟子の思想

当時、農家の許行が、分業を廃止する理想主義的な平等社会論を唱えていました。孟子はこれに反対、分業肯定論を唱えます。自給自足は反時代的で非現実的だとし、堯、舜の時代から大人（統治者）と小人（被統治者）の基本的分業が確立していたと主張します。

また孟子は、孔子の王道思想を継承します。王道は、孔子の仁愛を政治に拡張したもので、霸道に反対するもの。孔子は周の文王、武王、周公旦を理想化しましたが、墨子は夏の禹王の黄河治水の事績を理想化しました。孟子はさらに古く、堯、舜の道を説きます。堯、舜は禅定しましたが、禹以降は世襲となりました。孟子の人間観は性善説で、性（先天的な人間固有の能力）を善と考えます。これは荀子の性悪説に反対するものです。性善説が発展して、仁義礼智の「四徳」となります。制度論としては、井田制を唱えました。これは、九百畝を八家族に分割、中央の公田を共同耕作して租税とするという農地均分制です。当時は実現しませんでした、そのアイデアが隋唐時代の国家政策に採用され、日本にも班田制として伝わりました。

孟子の思想でもっとも論争の種となったのが、湯武放伐論（＝易姓革命説）です。

殷の湯王が夏の桀の王（&末喜）を、周の武王が殷の紂王（&妲己）を討って、新王朝を興したことの正統性をめぐる論争があります。伯夷、叔齊の兄弟は、殷末の孤竹君の子でしたが、ともに位を譲って亡命し、文王に仕えましたが、文王の子武王が紂王を討ったのに反対し、首陽山に入って餓死した記事が論語にあります。孔子はこの兄弟を絶賛しました。しかし孟子は、失徳の君主は天命を失ったのだからもはや天子でなくただの暴君であり、討ってよいという湯武放伐論を唱えました。これがのち、朱子学の正統説となりますが、日本の尊皇思想は、湯武放伐論を否定し君主（天皇）への絶

対的忠誠を唱えるところから出発しました。孟子は明治維新の源泉のひとつなのです。

中華帝国の成立と儒教

中国を最初に統一した秦の始皇帝は、儒教でなく法家の思想を重視しました。焚書坑儒の弾圧が有名ですが、漢代になると儒教も復興し、法家の思想と混淆しながら、中華帝国を統治する思想に再編成されていきます。

隋唐時代、儒教は正統思想の中心に位置しましたが、仏教や道教の勢力もあなどりがたく、土地所有に基礎をおいた世襲大貴族も強力でした。貴族制が解体し、皇帝を頂点とする絶対主義的な官僚制が完成するのは、宋代です。このときに完備された科挙の制は、清末までの中国に圧倒的な影響を及ぼします。とくに明代以降は、朱子学の解釈に従って科挙の問題が出題されるというかたちで、朱子学が正統とされ、思想が統制されました。

朱子と朱子学

朱子（1130-1270）は、宋代の儒学者で、姓は朱、名は熹、尤溪県（福建省）の生まれ。父は高級官僚で、本人も科挙に合格、役人を務めたのち任期満了で帰郷、実質的な年金生活とも言える祠祿の官となります。弟子を教えつつ勉学・著述に励み、『通鑑綱目』『近思録』や四書の注解を多く著しました。

朱子の興した朱子学は、唐代以降科挙にともなって出現した読書人層（士大夫）の思想的勝利の宣言とも言えるものです。士大夫は、土地を所有していないが国家中枢を占められるというのがその主張で、道教・仏教（禅宗）や、門閥貴族・地主と対立する考え方です。朱子学は、絶学となっていた孔子・孟子の道を再建するという正統性を正面に掲げ、四書→五経→道学という教育メソッドを確立しました。朱子学は、元代に科挙に採用されてから六百年間にわたって、中国の正統思想の地位を占めます。

近思録は、北宋の四氏（周濂溪、程明道、程伊川、張横渠）の著述の抜粋を編集した道学の入門書。大学章句、中庸章句、論語集注、孟子集注は四書の注解。朱子語類は弟子の編んだ朱子の全集です。

朱子学と理／気思想

朱子学の特徴は、徹底した合理主義と哲学的な宇宙観です。朱子自身、自然科学の素養があり、天体の運行を模型を使って研究したり、雪の結晶を観察したりしました。

朱子学は、天（宇宙）の実態について思索を重ねて、太極（もはやその先がない究極の理＝一気）→陰陽→五行（木・火・土・金・水の五大元素）→万物化生、という宇宙生成の仮説を体系化しました。ここで気とは、宇宙に充滿するガス状の連続的物質（エーテル？）をいい、それが物を形づくる基体物質で、同時に生命の根源でもあるといえます。これによって従来の儒教の概念を解釈すると、命＝天の賦与する行為、ないし、天が賦与したもの、性＝天に賦与された理、仁義礼智＝性の具体的内容、情＝心の奥にひそむ性が外物と接触するときの動き、などと体系的に整理できるのでした。

参考文献

- 大室幹雄 1981 『劇場都市——古代中国の世界像——』三省堂 ⇐博学多識の蘊蓄
宮崎市定 1974 『論語の新研究』岩波書店 ⇐当代一流の学者の分析の切れ味
戸川芳郎・蜂屋邦夫・溝口雄三 1987 『儒教史』（世界宗教史叢書10）山川出版社
貝塚茂樹 1985 『孟子』（人類の知的遺産9）講談社
三浦国雄 1979 『朱子』（人類の知的遺産19）講談社 ⇐叙述明快でなかなかの好著
山田慶児 1978 『朱子の自然学』岩波書店 ⇐自然科学者としての朱子を描いた名著
小室直樹 1996 『小室直樹の中国原論』徳間書店

☆次回6月25日はビデオ上映。次々回7月2日は、「尊皇思想とはなにか」の講義です。

キーワード …… 岐門の学、朱舜水、『靖献遺言』、浅見綱斎、水戸学、尊皇攘夷

江戸幕府はなぜ儒学を採用したか

日本史で、「徳川幕府は儒教を官学とした」と習ったはずです。なんとなく、当たり前のような気がします。しかしよく考えてみると、これは変だ。武士と儒学くらい、ミスマッチな組み合わせはないのです。

儒学は、中華帝国の正統思想。なかでも、宋の時代に起こった朱子学は、古典の新解釈と哲学的な宇宙観とを結合した、当時の最先端思想でした。朱子学の根本は、儒学の古典を学び徳を身につけた読書人階級が、官僚となって政治を行なうというもの。幕府は明の真似をして、朱子学を公認し、日本国家の指導原理としました。

徳川三百年の平和は、元和堰武げんなえんぶのおかげでした。もともと対立関係にあった大名の抗争を禁止し、城郭も一国一城に限って、現状を固定したのです。武力行使を許さず、幕府の権威を確立することが、朱子学に期待されました。しかし武士は、読書人階級ではありません。科挙ではなく、武力で支配権を手にしたにすぎません。そういう支配を、朱子学では霸道といい、儒教の正統な統治形態(王道)ではないとします。

幕府の狙いは、朱子学を絶対とし、朱子学を絶対とする幕府を絶対化することでした。朱子学には、統治の正統論があります。天皇に、征夷大將軍に任じられている徳川家が大名たちのなかで特別な位置を占めれば、幕府は安泰となるはずでした。

中国が、夷狄の国となった

ところが間もなく、明が満洲族に侵略されます。朱子学を正統としていた漢民族の王朝が、夷狄に征服されたら一大事です。明から何回も救援の要請が来ましたが、幕府が対応に困っているうちに、明は滅亡してしまいました。日本人を母にもつ鄭成功が台湾に拠って抵抗し、江戸の人気を博したのもこの頃です。亡命者も多く、なかでも王族の血をひく朱舜水という学者は、日本の儒学に大きな影響を与えました。

朱子学はなぜ、正統論をそれほど問題にするのか。それは、朱子学が成立した当時の中国(宋)自体が、存亡の危機にあったからです。宋の皇帝は金に捕らえられ、国土の半分を奪われました。南宋では抗戦派と和平派が対立しましたが、朱子は抗戦派でした。文天祥(宰相)や岳飛(將軍)の活躍も空しく、やがて南宋は元に滅ぼされます。この時代、儒学は「君臣の義」に基づいた、かずかずの英雄的人物を生み出したのです。

朱子学は、政治を絶対化しますが、それは(夷狄の)政権を絶対化しないためです。夷狄や逆臣が政権を取っても、それは「天」の意思(政治の原則)に反すると考える。土は「天」の秩序(君臣の義)を体現した存在ですから、体を張り、勝敗を度外視して、命懸けで原則を貫きます。朱舜水自身、多大の犠牲を払って明の再興のために奮闘しました。最後は日本に永住を決意し、水戸の徳川光圀あつくにの師となりました。朱舜水が再発見したのが、楠木正成くすのきまさしげです。南朝の後醍醐天皇に殉じて死んだ正成を、朱舜水は朱子学の理想を体現した存在として評価しました。これが、光圀の『大日本史』に影響します。

天皇は中国人だった!?

江戸時代、中国は日本にとって、世界の中心=憧れの的でした。中国人に生まれなかったことを生涯の不覚と悔しがる儒学者もいました。中国が儒学のモデルとなるのは、ソ連がマルクス主義のモデルとなったり、アメリカが民主主義のモデルとなったりするのと同じです。日本の事情を一切無視して、特定の外国にモデルを求めて憧れる思想を、慕夏主義ぼせうしぎといいます。

中国ではしばしば王朝が交替するのに、日本で天皇の正統な支配が途切れず続いている

のはなぜか。それは天皇が中国人だからだ、という説が唱えられました。林羅山は、「天皇は呉の太伯の子孫である」という南北朝の僧円月の説を紹介し、賛成しています。

このように林家が天皇中国人説をとったのに対し、山鹿素行やまがそうこうは、中朝論を唱えました。明が滅亡し、清に支配されて「畜類の国」となってしまったいま、日本こそが儒学の正統だということです。そこで素行は、日本を「中国」と呼びます。

いっぽう、日本には日本独自の歴史と伝統があるとし、儒学の古典を字義通りに受け取らない水土論も行なわれました。代表格は、熊沢蕃山です。彼は大名の求めに応じて、日本の現状に即した現実的な財政改革案・政策提言を行ないました。

ところで、江戸時代の政治体制は、朝幕併存。すなわち、天皇が將軍を任命し、將軍が大名に君臨するシステムです。そして、天皇が正統なので、幕府が正統である、というロジックをとります。それでは、なぜ天皇は正統なのに、権力を持たないのでしょうか。

闇斎学派は、幕府の正統性を否定した

江戸時代の儒学(朱子学)は、現政権の正当化を目的としていました。そこで林家も、太宰春台も、伊藤仁斎も、中江藤樹も、荻生徂来も、誰も幕府の正統性を否定しませんでした。その唯一の例外が、山崎闇斎やまざきあんさいの学統だったのです。闇斎とその学派(崎門きもんの学と称する)は、後の尊皇攘夷思想の源流、倒幕→明治維新の原動力となります。

日本を代表する政治学者・丸山真男まるやままさおは、江戸時代の儒学を政治学の観点から研究し、そこに近代的な意識の萌芽を見出しました。特に彼は荻生徂来に注目し、徂来の政治思想に「作為の契機」(社会秩序を、与えられたものでなく、人為的に作られたものとみる態度)があるとします。この説をまとめた『日本政治思想史研究』は、すぐれた書物ですが、皮肉なことに、明治維新を引っ張ったのは徂来学派でなく、闇斎学派でした。そこで、闇斎学派が果たした革命的な役割に注目したのが、山本七平です。彼は『現人神まことのかみの創作者たち』(1983)を著し、闇斎学派の浅見綱斎あさみけいさいが書いた『靖献遺言せいけんいげん』という書物の意義を強調しました。

山崎闇斎(1618-1682)は、最初比叡山に上って僧となり、のちに還俗して儒者となり、晩年には神道に入って垂加すいか、神道を興しました。儒者としてのスタートは遅かったのですが、秀忠の庶子で幕府の重鎮・保科正行の師となり、門弟数千を数えたといえます。主な弟子に、佐藤直方、浅見綱斎、三宅尚斎らがいます。闇斎は、論理徹底性を重んじ、また「湯武放伐論」(孟子の学説)を否定しました。(朱子学の四書には『孟子』が含まれているので、これは奇妙と言えば奇妙です。) また闇斎にとって、儒学と神道は矛盾するものではありませんでした。

湯武放伐論のおさらい

ここで、湯武放伐論を復習しておきましょう。湯武放伐とは、夏の桀けつ王を殷の湯とう王が、殷の紂ちゅう王を周の武王が、武力で倒したことをいいます。

殷の紂王は、妲己だきに溺れ、酒池肉林の宴を催し、逆らう者は炮烙ほうらくの刑に処しました。西伯(のちの文王)、九侯、鄂侯の三人の大臣がいました。九侯の娘が紂王の宮廷に入りましたが、淫らなことは嫌だと拒絶したので、怒った紂王は彼女を殺し、父の九侯も殺して塩漬け肉にしました。これをとがめた鄂侯も、殺して乾し肉にしました。西伯も囚われますが、「天王ハ聖明ナリ」という歌をよんだりして、反抗しません。釈放された西伯が病死したあと、息子の発(武王)の代になっても、紂王の暴政はひどくなるばかりです。そこで武王は、文王の位牌を奉じて起ち、紂王を討伐します。そして、殷を諸侯のひとつとして周に服属させました。いっぽう、西伯の徳を慕う伯夷・叔齊はくしい・くせいの兄弟は、王権を篡奪した「周の粟」は口にしないと行って会稽山にこもり、餓死します。

孔子は、文王、武王、周公旦の三人を聖人(模範的政治家)として尊敬します。しかし文王と武王の行き方は別々(文武両道)で、むしろ正反対です。また、伯夷・叔齊の兄弟も理想とされます。いったい儒者は、どう行動するのが正しいのでしょうか。

孟子をはじめ多くの儒者が、湯武放伐を正しいと考えるのに対して、山崎闇斎、浅見綱

斎らはこれを絶対に否定します。革命を否定するイデオロギーが、明治維新の原動力になる——このパラドックスを、以下で追いかけてみましょう。

『靖献遺言』は勤皇の志士のバイブル

浅見綱斎の著した『靖献遺言』は、戦後忘れられましたが、明治維新を戦った勤皇の志士のバイブル、そして、特攻隊の青年たちの愛読書でした。日本人の行動様式に大きな影響を及ぼした重要な書物です。

浅見綱斎(1652-1711)は、近江の町人(裕福な米屋)の次男に生まれ、教育熱心な父の影響で儒者となりました。実家が破産し、晩年は特に貧乏でした。もともと武士でない彼は、かえって武士以上に武士らしい厳格な規律で自らを律しました。

『靖献遺言』は、“生死を問題とせず絶対的規範を遵守した者の最後の言葉”というような意味で、八人を紹介します。①屈原(楚の詩人、憂国の政治家で、汨羅^{へいらか}の淵に身を投げて死ぬ)、②諸葛亮孔明(漢の再興を願って蜀漢の劉備を助けた軍師)、③陶淵明(晋代の官僚・詩人、腐敗を嫌い自然を理想とする詩を創作)、④顔真卿(唐の書家、安祿山の乱で義兵を率いて元と戦い、帰順せず獄死)、⑤文天祥(南宋の宰相、義勇軍を率いて元と戦い、帰順せず獄死)、⑥謝枋得(元軍と戦って部隊が全滅した後、故郷に帰って老母の葬式をあげる)、⑦劉因(元代の儒者、皇帝に招かれるが一日で辞表を出し帰郷)、⑧方孝孺(明の儒者、永楽帝を叛臣と断じ、詔書の起草を拒否、親族847人を殺害され、先祖の墓をあばかれても拒み続け、肉を殺がれて死ぬ)、の八人です。

このように「君臣の義」を絶対視することを、日本人はこの書物から学びました。「悠久の大義に生き」ようとした神風特攻隊や一億玉砕の考え方も、これが元です。

水戸光圀と『大日本史』

朱子学の正統論の論理的な帰結は、天皇が唯一の正統な君主であること、そして、湯武放伐論は認められないこと(さもないと、天皇を将軍が放伐してよいことになる)、を論証したのが山崎闇斎でした。浅見綱斎は、尊皇を貫き戦う人間モデルを創造しました。

水戸藩の徳川光圀(水戸黄門)は、天皇のためなら将軍を打倒してもよいと考える尊皇家でした。朱舜水の影響もあり、中国の『資治通鑑』にならって『大日本史』を編纂することになります。朱舜水の弟子・安積^{あさか}澹泊、闇斎の孫弟子・栗山潜鋒、綱斎の弟子・三宅観瀾が参加しました。しかし、南北朝のどちらが正統かという正閏論争、人物評価をめぐる「論賛」など編集が難航し、とうとう論賛はカット。光圀や主な儒者も死んでしまい、完成まで時間がかかったわりには、論理的に首尾一貫しないものになりました。

この作業の過程で、栗山潜鋒の『保健大記』、三宅観瀾の『中興鑑言』が著されます。前者は、保元・平治の乱を考察し、天皇家から武家への政権移行は、天皇家の「失徳」に原因する(天皇が規範を失ったので、源義朝が父・為義を処刑するという無規範状態が生まれ、戦乱が拡大して武家が天下を篡奪した)とするもの。朱子学の原則に従えば、父とともに処刑されても、天皇の命令に従ってはならないのです。後者は、後醍醐天皇の建武中興を考察し、後醍醐天皇は「帝王」意識のみ強烈で、それに伴うべき責任や自己規範が欠落していたので、武家から政権を奪いかえすことはできなかったとするもの。どちらも“天皇が徳を取り戻せば政権が自動的に戻ってくる”ことを含意し、大政奉還を預言した内容となっています。

水戸学と尊皇思想

水戸藩ではその後、闇斎学が卑俗化したかたちで尊皇思想に育っていきますが、初期の闇斎学派は、昭和の皇国史観のようにコチコチのイデオログでなしに、リアリストでした。たとえば、佐藤直方は、「日ノ神ノ託宣ニ……子孫ニ不行儀ヲスルモノアラバ蹴殺サウト被仰タナレバ、ヨイコトゾ(義にもとる天皇がいたら蹴殺されるとよい)」と天皇を批判しています。万世一系とはいえ、女帝はいるは、兄弟を殺して位に就いた天皇はいるはで、決して正統でないというのです。また三宅観瀾の『中興鑑言』は、後醍醐天皇批判が

あまりに激しいため、戦前出版されたものは伏字だらけでした。

しかしやがて、水戸学は、あるべき天皇像にしたがって歴史を再構成するという皇国史観に傾いていきます。「天皇が万世一系なのは有徳だから、有徳なのは万世一系だから」というトートロジーが幅を利かせます。このような尊皇思想が、攘夷思想と結びつくときに、幕府を打倒する大きなエネルギーをうんだのでした。

赤穂義士論争と明治維新

元禄一五(1702)年、元赤穂藩の藩士・大石良雄ら四六人が、吉良邸を襲撃、主君浅野長矩の仇・吉良義央を討ちます。この事件は国民的な議論をよび、三宅観瀾『烈士報讐録』ほかおびただしい著書、論文が発表されました。

闇斎学派の佐藤直方は、原則的朱子学の立場から、仇討ちを否定します。いわく、浅野は公法を犯して処刑されたもので、そもそも吉良を「仇」とするのは不当である。浅野も四十六士も「公朝」(国家秩序)よりも私怨を先にしたもので、同情の余地なし、とします。同じ否定論でも、太宰春台はニュアンスが違います。いわく、まず幕府は誤判を犯した。殿中殺人は死刑だが、未遂は減刑されるはずである。いっぽう、封建制の原則からすれば、武士は主君に忠誠の義務があっても、幕府に忠誠の義務はない。そこで、浅野家の再興を幕府に陳情、駄目なら赤穂で城を枕に戦死すべきだった、とします。

大学頭・林信篤は、『復讐論』を著しました。いわく、幕府の法は義に反するものである。四十六士のように、心情的に君主と一体化して行動してこそ、義である。そこで、法を破り処刑されても、四十六士は立派である、とします。幕府みずから法の義を否定するなど、論理がめっちゃめっちゃのようですが、義士の称揚は幕府の政策でした。

いっぽう、同じ闇斎学派でも浅見綱斎は、断固、肯定します。いわく、吉良と浅野の関係は「私闘」であり、それを咎めるなら「喧嘩両成敗」の原則を適用するべき。けれども幕府は「大礼ノ場ヲ乱ル罪」で罰してしまった。そこで、四十六士が仇を討つのは当然である、とします。しかも浅見綱斎は、「忠孝一致」の原則——主君(浅野長矩)〜赤穂藩士の関係を、父〜子の倫理に見立てて絶対化すること——を打ち出します。朱子学ではあくまで分離していた義／孝を、忠＝孝と一致させたのが、日本朱子学の特徴です。

当時の天皇家は、山城の国の一領主。法的に幕府の支配下に置かれていた点は、浅野家の赤穂藩と変わりません。もし、天皇を絶対視し、その確認不能な「意志」を自らの志として行動する人間が出現したら? 赤穂義士の場合と同じで、それを肯定するほかないでしょう。幕末には、薩長や水戸藩ばかりか、幕府も会津も、国中が尊皇を旗印にするようになります。そういう雰囲気、攘夷の主張(外国に侵略されるのは、政治的な正統性が誤っているからだ)と結びついた結果、尊皇攘夷思想→倒幕運動が成功したのです。

□参考文献□

- 浅見綱斎 1687『靖献遺言』→1939 五弓安二郎訳注、岩波文庫
- 小室直樹 1996『小室直樹の中国原論』徳間書店
- 丸山真男 1952『日本政治思想史研究』東京大学出版会
- 丸山真男ほか編 1980『山崎闇斎学派』(日本思想大系31)岩波書店
- 山本七平 1983『現人神の創作者たち』文藝春秋 →山本七平ライブラリー

☆小テスト(2/3)のカヴァー:①般若心経の分析や感想を書いて提出する。②般若心経を暗唱する(月火水金の昼休みに西4-603 橋爪研で)

☆来週は、最後の講義「再び宗教を考える」+質問大会です。質問のある人は紙に書いて教室、または西4入口の郵便受けに提出して下さい。メールでも可(加點)。

hashizm@valdes.titech.ac.jp なるべく早めに提出。遅くも7月7日(水)昼休みまで★期末テスト……7月16日(金)の授業の時間に実施します。簡単な知識問題と、論述問題からなるテストで、今年度は全面的に持ち込み可とします。遅刻しないこと。

☆任意レポートを、随時受け付けています。最終締切は、9月1日をメドに願います。

“宗教とは一体なんですか？”と聞かれても、もう大丈夫……？

さまざまな世界の宗教

これまで、駆け足ながら、ユダヤ教、キリスト教、仏教、イスラム教、儒教について見てきました。これらについて話しそこねたことも多いですし、そのほかにも、ヒンドゥー教、シク教、道教、神道などの宗教があります。けれども、大掴みながら、人類の文化遺産としての主要な宗教の概略について、理解していただけたのではないかと思います。

宗教について考えたのは、宗教それ自体への興味もさることながら、それが社会に及ぼす影響が大きいからです。人びとの価値観や行動様式のバックボーンは、多くの場合、宗教なのです。宗教を理解すると、ある社会の人びとの行動や社会制度を、よりよく理解することができます。そこで、宗教社会学の大先輩、マックス・ヴェーバーにならって、宗教を下書きにした社会現象の解明を試みましょう。

経済活動と宗教

ヴェーバーがもっとも注目したのは、経済活動に及ぼす宗教の影響でした。特に、合理的な経営や営利の精神（世俗内禁欲）が、どのように組織されるかという点です。

ユダヤ教では、利子をとるのは禁止です。それは、労働の対価でないからです。『ヴェニスの商人』で、ユダヤ人シャイロックが高利貸しとして登場するのはなぜでしょう。それは、キリスト教徒は異教徒なので、宗教法の埒外だからです。イスラム教の場合も、利子は禁止です。イラン・イスラム革命のあと、シャリア（イスラム法）に忠実な国づくりを進めているイランでは、無利子銀行の創設が検討されています。これらの例は、逆に、営利活動や利潤を宗教的に正当化するのがいかにむずかしいかを示しています。

ヴェーバーの解答は、プロテスタンティズムがそれをなしとげた、というものでした。ピューリタニズムは、世俗の職業を神聖化し、労働を美德としますが、同時に、個々人がその成果（利潤）に執着することを禁止します。そのため、彼の労働の成果は、自分のものではなく神のもの、という性格を帯びます。彼らの構成する法人（企業）は、彼個人と区別されて、神の栄光を受けつつ拡大再生産を始められます。そのプロセスは、徹底的に合理化されます。かくて資本主義がスタートした、というのがヴェーバーの見解でした。

日本人はなぜ勤勉か

ヴェーバーの学説は、社会科学の定説ですが、それなら日本人はなぜ勤勉なのか、宗教（特にキリスト教の信仰）を持たない日本人がなぜ資本主義を成功させたのか、という疑問も湧いてきます。この疑問には、ふた通りの解答が可能です。ひとつは、日本人は表面上宗教を信じていないようにみえるが、実は宗教に等しい信念を持っているとするもの。もうひとつは、日本人は宗教を信じていないからこそ資本主義で成功したとするもの。

前者の代表は、山本七平の仕事でしょう。彼は『勤勉の哲学』を著し、禅宗の鈴木正三や心学の石田梅岩ら江戸時代の思想家に日本人の勤勉の思想的ルーツを発見しました。そして、それをベースにした日本人の暗黙の行動様式を、「日本教」とよんだのです。

後者を明確に主張した学者はいませんが、日本人が、営利を禁止する宗教的ルールを知らないのは確かです。土農工商の身分秩序は、明治政府の命令であっという間になくなりましたが、インドのカーストならこうは行きません。

ちなみに、カースト制を否定する宗教として、シク教があります。グル・ナーナク（1469-1548）の創始したシク教は、ヒンドゥー教もイスラム教もひとつの真理を説くと教え、聖職者を認めず、職業労働を重視し、勤勉で識字率の高い教団をつくりあげました。パン

ジャブ州を中心に1400万人、ターバンを巻く、鉄の腕輪をする、など独特の服装でひと目でわかります。イギリスのインド統治まで独立を保っていたのですが、インド／パキスタン分離のあおりで独立をはたせず、独立運動が続いています。

政治と宗教

キリスト教はまた、政治にも大きな影響を与えました。

キリスト教の最大の成果は、地上の権威（政治権力）と神の権威（宗教的権威）とを分離したことです。ここから、政教分離という近代社会の政治原則がうまれました。

これと対照的なのは、儒教です。儒教には、一神教の神にあたる超越的な権威が存在しません。聖人とは、過去の政治家であり、要するに人間です。中国では、政治（人間の人間に対する関係）がすべてを決するのであり、死後の世界や超越的な権威は考えられていません。政治がよければ、自然災害さえ起こらず、人民は幸福になります。中国の大平原は大規模な治水土木工事を遂行できる巨大な統一権力（官僚制）を不可避としました。

伝統中国では、官僚（政治家）に、権力も富も文化的・社会的威信も、すべての社会的資源が集中します。商人は経済力があっても、社会的尊敬はえられません。中国で共産主義が成功したのも、こうした伝統と関係があるでしょう。共産党の官僚制は、中国人におなじみでした。いっぽう日本では、共産党が一般民衆の支持を集めたことはありません。

法律と宗教

法律についても、宗教が深い影を落としています。

儒教の話が続けるなら、儒教にいう法律とは“統治階級が民衆に下す命令”です。中国の法律は、律令の名で知られますが、律（刑法）を中心とするものです。「刑は士大夫にのぼらず」とも言って、統治階級の人びとは、必ずしも刑法の処罰の対象でなく、統治者の指示に従って自罰します。統治階級にとって、法律は自分の支配の道具ですが、民衆にとっては迷惑このうえないものです。日本人の法律観も、この影響を受けています。

一神教の法律観は、これと大きく違います。法律（律法）は神から発するもので、人間社会全体を拘束します。統治階級と一般民衆とは、神に対して連帯責任を負います。そこではじめて、『法の支配』が可能になるのです。

儒教は、法治（法の支配）でなく人治（人の支配）が原則でした。社会主義中国が市場経済に移行しようにも、法の支配が実現しにくいのは、こうした背景があります。

葬礼と宗教

宗教は、社会生活を円滑に運行させるための儀式をそなえているのが普通です。

葬式を例にとれば、日本では仏教の独占事業ですが、これが江戸幕府の政策だったことは前にのべました。もともとの仏教は世俗の労働を禁止していましたから、葬式を行なえるはずもなく、中国でも葬式は原則として儒教ないし道教のやり方で行ないます。禅宗だけは、何でも自分でやるので、僧侶が死亡すれば葬式を行なったと思われれます。

ゾロアスター教は火葬でなく鳥葬ですが、火を神聖視するので火葬はできません。いっぽうイスラム教は火葬でなく土葬ですが、火は地獄を象徴するので、最後の審判まで眠りにつく死者にふさわしくないとされます。キリスト教も、火葬を好みませんが、それはやはり最後の審判の観念と関連があります。

国家と宗教

日本の近代化は、天皇の権威と不可分でしたが、それは負の遺産をもたらしました。それが靖国神社問題です。明治国家は、天皇の名のもとに維新を成功させた軍隊の伝統を大切にし、統帥権（軍に対する天皇の指揮命令権）を政府から独立させました。この結果、軍隊を誰もコントロールできなくなり、軍は国家内国家のようにふるまって、日本を破滅の淵に追い込みます。神道は宗教でないことになっていたのも、明治維新以来の「国事殉

難者」を祀る靖国神社は、陸海軍および内務省によって直接管理されていました。

戦後、占領軍の指令により、靖国神社は国と関係を断たれて、宗教法人となります。けれども、戦没者の合祀は、厚生省・市町村役場の協力で、進められました。そして約20年前、「国家護持」運動を断念した靖国神社は、東條英樹ら東京裁判のA級戦犯を合祀しました。この年から、首相らの「公式参拝」にアジア諸国の非難が集まり始めました。

戦前～戦中、国に命を捧げた人びとの「霊」は、靖国神社に独占されているので、日本国として、それに哀悼の意を表せない。——靖国神社問題の本質はここにあります。

質問に答える

ここで、質問に答えたいと思います（講義で実質的に答えたもの等は抜かします）。

Q1 どうして人間は宗教をもっていないといけないのですか？ ⇒それは端的に言えば安全のため。人間らしく生きるため。法律や道德の基本が宗教ですから、宗教なしに人間らしく生きることも、道德的であることもできないと世界の人びとは考えます。

Q2 右が栄光、左は不浄というのは世界の共通ルールか？ ⇒そう考える民族が多い。右利きと関係があるかも。エルツ『右手の優位』という人類学の古典がある。

Q3 ゾロアスター教の影響とは？ ⇒同教は、善の神／悪の神が争う「不安定均衡」として世界を理解する。最後に善が勝利するのが安定均衡＝終末。現実世界の描写はリアルに、終末の到来は因果的必然になる。一神教では、終末は神の決断＝不条理になる。

Q4 ユダヤ人はどうして嫌がられている？ ⇒①異民族だから。②キリスト教徒でないから。③優秀だから。④キリスト教徒に、ユダヤ教に対するコンプレックスがあるから。

Q5 キリスト教では神が人間を裁くのに、そんな神と人間が契約を結べるのはなぜ？ ⇒人間は被造物のなかで（天使を除けば）最高の存在で、神と交流できるのは人間だけ。世界が滅ぶ裁きの日に、人間だけに救済のチャンスが与えられる。その約束が契約。

Q6 神が慈悲深いのならなぜ不寛容なのか？ ⇒慈悲と不寛容は、両方とも神が「主」であることの属性だから矛盾しない。神が「主」であることを認めない者には不寛容。

Q7 イエスの復活の意味は？ ⇒それ自身奇蹟であり、最後の審判で人間が救済されることの約束です。復活したキリストは、やがて救済者として再臨するのです。

Q8 ヨーロッパの王権神授説は、神（天）を絶対化して王（天子）を相対化できるか？ ⇒一神教はもともと、神を絶対化～王を相対化している。神が絶対なのを利用して、王を絶対化しようという学説が、王権神授説。中国ではもともと王・皇帝が絶対なので、それを上回る権威をみつけて相対化をはかったのが天→天子の学説。動機が正反対。

Q9 キリスト教の教会音楽を、信仰のない自分が音楽として楽しむのは、キリスト教徒にとって冒瀆にあたるか？ ⇒教会音楽は、正式の規定によるものではありません。初期には音楽自体が敬遠され、式典の文言（ラテン語）に旋律をつけて歌うグレゴリオ聖歌があっただけでした。これは、ユダヤ教を真似たものと言われます。そののちポリフォニーの教会音楽が民衆教化（ミサ）のために作られるようになります。同じ作曲家が世俗音楽も作るのが普通でした。ベートーベン以後、世俗音楽が自立します。教会音楽は音楽自体を楽しむもので、冒瀆になりません。なお新教の教会音楽は簡素です。

Q10 キリスト教の信者はなぜ増える？ ⇒増加はそれほどでもない。韓国や一部の第三世界で目立つ程度。むしろイスラム教のほうが、増えている。

Q11 なぜイスラム教はよく問題を起こすのか。アフガンのタリバンや、原理主義のテロなど。⇒イスラム教に限らず、ユダヤ教やキリスト教も同様。一神教の場合、神が正しさの規準なので、そこから現実を批判し、反体制になりうる。キリスト教はかつて宗教戦争をひき起し、反省して「寛容」を学んだ。それが思想・信条の自由→近代なのだ。

Q12 縁起とは？ ⇒仏教で説く「因果関係」。ただし、社会的善悪→相応の結果を主張。

Q13 サンガが平等で釈尊と弟子も対等なら、どうやって治められていた？ ⇒会議を開き全員一致で決めていた。修行の進み具合が違っても、サンガの成員として平等だった。

Q14 四苦八苦を掛け算すると、 $36+72=108$ となる？ ⇒百八は中国では、数が十分多

いことを表す。この計算式と関係あるかどうか、不明。

Q15 『西遊記』の如来仏は、釈尊か？ ⇒如来はブッダの別称。釈尊だと思うが、そのほかの如来も出てきたような気がする。

Q16 葬式や法事で経を読むのは？ ⇒①経を読むこと自体が善行。②自分の善行を他人（死者）に贈与できる（回向）→成仏。③経を聴く霊？がいると考える点が非仏教的。

Q17 巡礼と遍路の違い？ ⇒イスラム教の巡礼は、神の命令。キリスト教の巡礼は、根拠あいまい（神は遍在するはず）。遍路は、在家信者の修行の一種（任意だが功德あり）。

Q18 儒教の「天」とキリスト教の「神」の違いは？ ⇒天は、①人格的でない、②自然現象から超越していない（その一部）、したがって、③絶対でない。

Q19 日本や中国では龍は善なるもののようですが、キリスト教のドラゴンは悪の象徴です。これはなぜ？ ⇒龍は大河（皇帝の統治の対象）で、それが存在しなくなることはない。いっぽうドラゴンは不信仰や悪魔、つまり存在してはならないもの。信仰はイエスの荒野の試みのように、悪魔と対峙し論破することで証明されるべきものです。

Q20 「怪力乱神」を語らぬはずの儒教が、閻斎学派で神道と矛盾しないものとされたのはなぜか。また、天皇の宗教的立場は？ ⇒仏教と神道は渾然一体のもので民衆の間に根を下ろすいっぽう、儒教は民衆から遊離していました。儒者でありながら神道に没頭したのは閻斎のみで、弟子たちはとりあえず距離を置いていました。また天皇は幕末まで仏教徒で、宮中に仏壇がありましたが、明治維新とともに整理されます。天皇は儒教的な意味での皇帝であると同時に、神道の総元締め、宗教的カリスマの継承者としても位置づいています。尊皇思想が実現した王政復古（天皇中心の体制）は皮肉にも、欧米的な専制君主制だったため、中国的な儒教の皇帝としての位置づけはなくなり、神道の要素だけが明治以降に残っていくことになりました。

Q21 日本の宗教人口が2億人以上なのはなぜ？ ⇒二回数えるから。江戸時代以来の宗旨で葬式をするので、一回。個人として何を信じるか（新興宗教）で、もう一回。

Q22 外国で無神論者として軽蔑されないために？ ⇒①宗教に対する知識をもつ。②日本人の信仰心を理解する。③祖父の代まで熱心な仏教徒だが私はより寛容、などと説明。

Q23 なぜ「神」や「死後の世界」を信じる科学者がいるのか？ 教会は科学をどうみているのか？ ⇒日本では、科学が宗教と切り離されて導入されたため、「科学の時代にまだ宗教を信じている人がいる」という感覚になる。しかし、両者はもともと同根。科学者は、神の創造の秘密（叡知）を人間の知力で探る、という宗教的感覚を持っている。

Q24 オウムは宗教か？ ⇒かなり典型的でまともな新興宗教。ただし、刑事事件を起こすことを許さなくてよい。麻原は俗物なため、あの程度のことで済んでいる。

★質問をして下さった皆さんには、一枚につき2～3点加点しました。ありがとう。

☆試験……来週（7月16日）、試験を行ないます。一部が知識問題、残りが論述問題。いずれも持ち込み可。『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』は生協書籍部で扱っています。教室はW241。（試験に代わるレポートで、試験に代えることもできます。）

☆そのほか、任意レポート（題自由）を随時受け付けています。

☆試験の答案を、9月6日以降返却します。返却を受けた人は、任意レポートを出せません。

試験に代わるレポート

課題……今回の講義の内容を参考にしつつ、あなたの関心にもとづいて自由にテーマを設定し、複数の宗教の比較をまじえながら、自分の考えをのべなさい。

★冒頭に「試験に代わるレポート」と明記すること。

枚数……レポート用紙4枚（400字詰め原稿用紙換算で10枚）程度

締切……8月25日（水）午後5時 提出場所……西4号館3階入口郵便受（or郵送）